書物禮讃

VI

SHOMOTSU



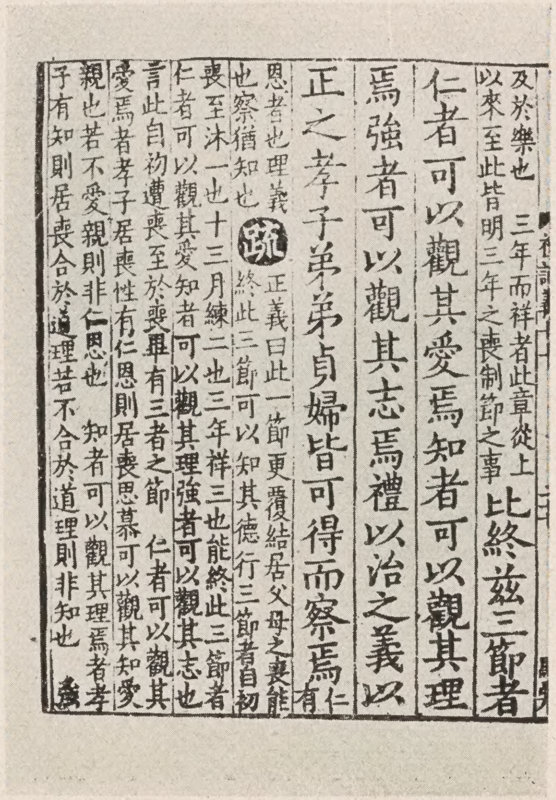
RAISAN

1927

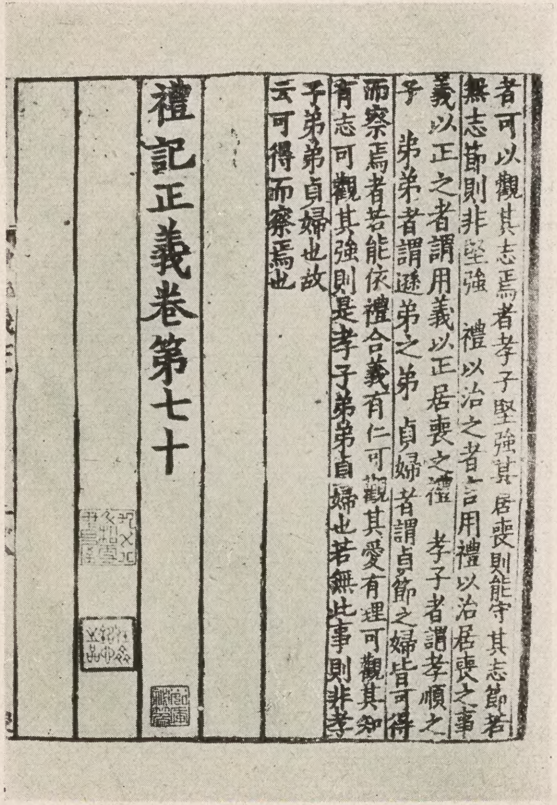
昭和二年四月廿五日印刷
昭和二年四月三十日發行

書物禮讚　第六號

目次



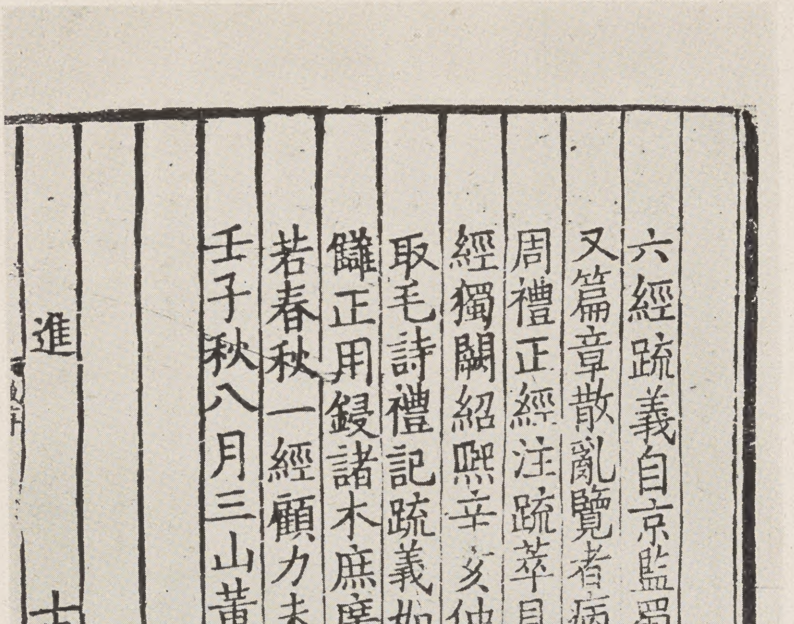
及於樂也　三年而祥者此章從上
以來至此皆明三年之喪制節之事
比終茲三節者
仁者可以觀其愛焉知者可以觀其理
焉強者可以觀其志焉禮以治之義以
正之孝子弟弟貞婦皆可得而察焉仁
有
恩者也理義
也察猶知也
疏
正義曰此一節更覆結居父母之喪能
終此三節可以知其德行三節者自初
喪至沐一也十三月練二也三年祥三也能終此三節者
仁者可以觀其愛知者可以觀其理強者可以觀其志也
言此自初遭喪至於喪畢有三者之節　仁者可以觀其
愛焉者孝子居喪性有仁恩則居喪思慕可以觀其知愛
親也若不愛親則非仁恩也　知者可以觀其理焉者孝
子有知則居喪合於道理若不合於道理則非知也



者可以觀其志焉者孝子堅強其居喪則能守其志節若
無志節則非堅強　禮以治之者言用禮以治居喪之事
義以正之者謂用義以正居喪之禮　孝子者謂孝順之
子　弟弟者謂遜弟之弟　貞婦者謂貞節之婦皆可得
而察焉者若能依禮合義有仁可觀其愛有理可觀其知
有志可觀其強則是孝子弟弟貞婦也若無此事則非孝
子弟弟貞婦也故
云可得而察焉也

禮記正義卷第七十

八行七十卷本宋板禮記正義（一）



六經疏義自京監蜀本皆省正文及注
又篇章散亂覽者病焉本司舊刊易書
周禮正經注疏萃見一書便於披繹它
經獨闕紹熙辛亥仲冬唐備員司庾遂
取毛詩禮記疏義如前三經編彙精加
讎正用鋟諸木庶廣前人之所未備乃
若春秋一經顧力未暇姑以貽同志云
壬子秋八月三山黃唐謹識

進士傅伯膺

宋板禮記正義黃唐跋（二）

宋板禮記正義に就いて

―乾隆寵臣刻書の失敗談―

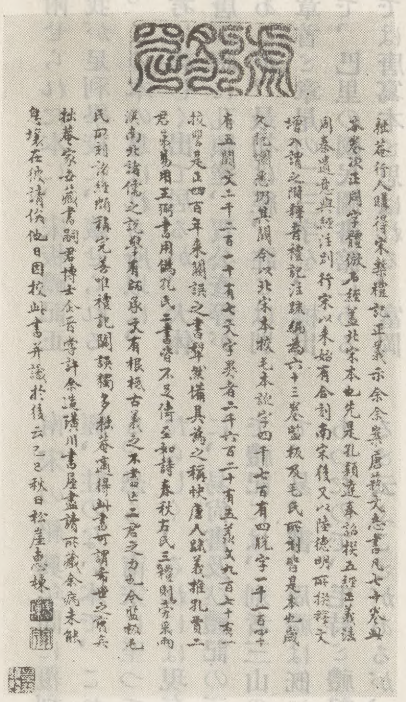
内藤湖南

最近支那で玻璃版に附せられた本に、宋板禮記正義がある。その原本は我が足利學校に、藏せられる本と同種のものである。この本の尊ばれる所以は、近藤重藏氏の正齋書籍考に詳しく出て居るが、大体を云へば、五經正義は唐の時に孔穎達、賈公彥等が勅を奉じて作つたのであるが、最初は經、註とは別行して、單に經、註の章首と章尾の二三字を、標出してあるに過ぎないので、巴里の國民圖書館にある燉煌本左傳正義、我國では唐寫本と思はれる、富岡氏並に小島氏所藏の毛詩正義殘卷などが、即ちその標本である。

宋の時に汴京の國子監で出版された五經正義も、全くその式に依つたもので、宮内省圖書寮所藏の尙書正義、自分が所藏する毛詩正義等は、北宋刊本を南宋の紹興年間に覆刻したものであるが、やはり經、註のない本で、これを世に單疏本と云つて居る。恐らく南宋に至つて初めて、註疏合刻本が出來たらしく、それには現存せるもので、我が足利學校に、易尙書及び禮記の三種が傳はつて居る。その中で禮記には、刻者三山の黃唐が紹熙壬子の跋があつて、易、書、周禮は旣に、その以前に註疏合刻本があつたので、毛詩と禮記の註疏合刻本を、新に刻すると云ふことがあるが、（口繪二參照）易、書、周禮の刻せられた時は、はつきりしないけれども、松崎慊堂先生などは、多分淳熙前後であらうと云つて居る。それが即ち註疏合刻本の始めで、その後は慶元年間に至つて、吳興の沈中賓が左傳正義を刻した。その後引續き、註疏の附釋音本と云ふものが出

來たが、これも慶元頃に出來たのであるけれども、これは建安の書坊の刻で、その板式などは前の註疏のみの合刻本に比べると、遙かに劣つて居る。これが所謂十行本と云ふものである。

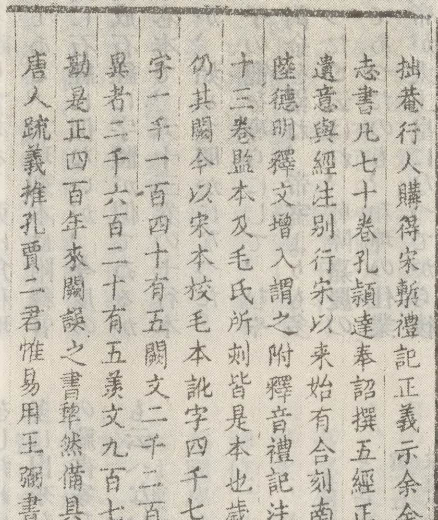
紹熙の經註合刻本の禮記正義は卷數七十卷で、十行本は卷數六十三卷となつて、この點も前の樣式を變へて居る。前にも云ふ如く我が足利學校にも、この紹熙本の禮記正義があるが、惜しいことには七十卷ではあるけれども、卷三十三から四十までの八卷が缺本となつて居るが、今度玻璃版になつた本は、幸に完全して居る。（口繪一參照）勿論處々落丁があるから、これは兩本を對校する必要がある。元來禮記正義の單疏本は、寫本の殘本二卷ほどのみが世に傳はつて居り、單疏本の宋板は全く傳はらない。今玻璃版になつた本と、足利本とは、皆經註合刻本であるけれども、現存せる禮記正義の中で、最も古いものであるから、その貴重なることは知るべきである。



（一）玻璃版ノ惠棟跋

近年吳興の劉翰怡氏が、單疏本の殘本を刻する時宋の七十卷本の正義が、盛百熙酒祭の所に藏せられてあつたが、今は行衛が不明で、對校することが出來ないといふことを書いてあるが、この度出版されたのは、即ちその盛百熙本である。盛百熙は清朝の宗室で、名を盛昱と云ひ、肅親王の分家であつて、光緖二十五年に歿した有名な學者で、且つ藏書家である。その歿後二十年にして藏書が散佚したが、この七十卷本の禮記正義は、やはり滿洲人で有名な收藏家である、完顏景賢氏に歸したらしく、景賢氏は一昨年歿したから、その書が又散じて、今は廣東の收藏家潘明訓氏に歸し、潘氏は現に

兵亂を避けて上海に來て居り、その藏書並に書畫などは、皆英國工部局の警察に預けてあると云ふことである。それを先の大理院長並に財政總長をした、董康授經氏が借り出して、玻璃版に附したが、董氏は支那の現代の出版界に於ては、一二を爭ふ人で、しかもその刻書は非常に精善なることを以つて、世に知られて居る人であり、常に刻工數十人を抱へて居る。時としては又玻璃版をも用ひるが、氏の玻璃版は支那の普通の版とは違ひ、その紙料から製本に至るまで凝りに凝つて、殆んど殿板の外は古來並びなき製本を出すのである。この禮記正義も、印刷紙料皆精美を極めて居つて、しかも僅かに二十部だけを印出して、後は版を破つて了つた。それでその出來た本は、殆んど原書に次ぐ貴重なものと云つてよろしいのである。賣價は二百五十圓程と聞いて居るが、日本には十部だけしか、賣り出す餘裕がないと云ふことである。


抽菴行人購得宋槧禮記正義示余余案唐藝文
志書凡七十卷孔穎達奉詔撰五經正義法周秦
遺意與經注別行宋以来始有合刻南宋時又以
陸德明釋文增入謂之附釋音禮記注疏編爲六
十三卷監本及毛氏所刻皆是本也歳久脱爛悉
仍其闕令以宋本校毛本訛字四千七百有四脱
字一千一百四十有五闕文二千二百一十有七
異者二千六百二十有五羨文九百七十有一點
勘是正四百年來闕誤之書犂然備具爲之稱快
唐人疏義推孔賈二君惟易用王弼書用僞孔氏

(二) 和珅刻本ノ惠棟跋

又この本に關して面白い挿話がある。世に和珅影刻本の附釋音禮記註疏と云ふものがあつて、これも今日では流傳が少ないので、藏書家に貴重せられて居るが、その本には有名な漢學の大家、惠棟の跋が載つてあるので、その本が惠棟本と稱せられて居る然るに惠棟の跋には、唐の藝文志によつて、禮記正義は七十卷と書いてあるのに、附釋音本は六十三卷本であるので、既に前から疑問とせられて、和珅が僞本をつかまされたのだとの說があつた。所がこの度出版せられた七十卷本の禮記正義

には、惠棟手書の跋（挿畫一）がある。これと和珅刻本の跋（挿畫二）とを對校すると、『余按唐藝文志書凡七十卷』の句の下に、『此本卷次正同字体倣石經蓋北宋本也』の句がある。尤も惠氏が、この本を北宋本と見られたのは、誤りである。兎に角和珅刻本にはこの三句を省いてある。和珅刻本は附釋音本であるから、字體は更に石經に似ないが、今度の玻璃版本は、頗る唐の開成石經に字體が似てゐるから、惠棟が見たのは七十卷本で、六十三卷の十行本ではなかつたと云ふことが、始めて明かになつた。

和珅は乾隆の末年に天子の寵を專らにして、むやみに賄賂を取り、富數千萬金を累ね、帝室よりも多くの金銀寶器を有して居つたと云はれ、乾隆嘉慶の際の、内亂討伐が不成績であつたのも、和珅の仕業によると云ふので、乾隆帝が太上皇になつてから後崩御すると同時に、嘉慶帝に誅戮された程の奸臣だが、乾隆帝に愛せられるだけあつて、經學などにも喙を容れたがり、石經の校勘についても、當時の學者のした仕事に、苦情を持ち出したりなどした程で、少しばかり學問の解る所から、禮記の註疏を影刻したりしたが、やはりそこが素人の悲しさには、書賈に欺かれたのであらう。十行本に贋物の惠棟の跋をつけた本を、賣りつけられたものと見ゐる。それが百三十餘年を經た今日になつて、飛んだ恥曝しをしたわけである。柄にない藏書、刻書なども、滅多に出來ないと云ふ例を示したわけであるが、日本の藏書家などには彼の和珅の類が尠なからずないとも云へない。（談話筆記）

内藤博士と寫眞

先生は寫眞嫌ひで有名な方、滅つたに撮られた事がないそうである。先生の還暦の紀念出版『支那學論叢』でも寫眞ではない。油繪の肖像畫である。日本服の方であると御家庭の都合上、二三御寫しになつた事もあるそうです、洋裝と來たら、とても、珍らしい。處が或る人が最近ふとした所から洋裝のものを發見して珍藏せられてる。

それは先生が先年、帝大より洋行せられる時旅行免狀に寫されたもの、先生の洋裝寫眞は、あとにも先にも、これだけだらうとの、もつぱら評判である。

晩學書志（中）

新村出

鄭舜功の日本一鑑十卷及び圖經三卷は故富岡桃華君が珍藏した支那の寫本であつて東西の帝國大學共に一本を傳寫してあるが、これも須く我國で刊行すべき隨一の珍書である。故人既に藝文の舊號に於て解題し、私の如き亦屢々この本を利用してをり毎々之に因て故人を追懷する次第である。本書が舊代支那人の著はした日本志として又倭寇史料として絶好の書であることは多說するまでもない。著者鄭舜功は日本にも使した經歷もあり彼れが直接の觀察傳聞を主として書いた本であるから、記載に誤謬はあつても嘉靖時代の事相を直寫せる點に於て參考たるべきものが多いのである。撰述は嘉靖四十三年甲子即ち我が永祿七年（西紀一五六四）である。

私が今本誌を借りて記るしたいのは本書卷四の首にある『文敎』および『書籍』の二章中に見ゆる日本の學校と典籍との事どもである。今その要を摘むと、『文敎』の章に云く、

夷都列國久開學舘院、而夷僧向、…惟其下野大設學堂、題名學校、一名足利、又名風世、中奉先師神位、學之左右、開鑿二渠、名洙泗、皆僧主之、列國學徒甞二三千人、講學其中、惟蹲距之未改也。

これは連歌師宗長が永正六年八月東路の津登のうちに於て『足利の學校に立寄侍れば孔子子路顏回この肖像をかけて諸國の學徒かうべを傾け日ぐらし居たる體はかしこく且はあはれに見侍り』と記るした校主五世東井の永正大永時代より、一時代隔り、大隅伊集院氏の出であつた七世九華が校主であつた、天文永祿時代のことで、拙著『足利學校の盛時と西敎の宣傳』（南蠻廣記）のうちに載せておいた如く、吉利支丹宣敎師の間にも足利學校の名がひゞいた同

校全盛時代を反映したものである。また昨年出たシユールハンヌルが獨譯せる伴天連ルイス・フロイスの日本志の西暦一五五〇（天文十九年）一五六〇（永祿三年）一五六六年（永祿九年）の諸條下にも散見してゐる所と符節を合はす趣がある。

さて次に日本一鑑の書籍の章を見るに、また左の重要なる記事がある。それによると漢籍を珍藏する日本の文庫は山城と大和と下野との文庫および相模の金澤文庫が著名だと記るされてをる。全文を載せるとかうである。

中國書籍流彼多珍藏山城大和下野文庫及相模金澤文庫、抑惟金澤大和二文庫以爲聚書之淵叢、他庫雖藏書書未及二庫也。

かくの如く大和と金澤とを稱揚してあるが、大和とは蓋し、奈良あたりをさしたものと思はれるけれども甚だ茫漠たるを免れない。ともかくもこゝにも足利學校の文庫が出て來、之と共に金澤文庫とがあらはれてくる。なほ前に書きおとしたが、日本一鑑卷三の佛法の章にも、下野學校皆僧主者とも記されてゐる。

鄭舜功は日本に於て聞見した書物として漢籍佛典凡四十四部と和書凡三十部を錄してゐる。『醫書のうちには醫者大全の翻刻本の存在を擧げ、又別に記して云く、醫書の如きに至つては乃ち生を治むるの本なれば國人至つて之を重んず、醫書大全その間に翻刻せらる』と特筆した。この本は大永八年（享祿元年）すなはち嘉靖七年（一五二八）の出版で堺の阿佐井野宗瑞の捨財刊行であるから、鄭舜功が豐後等に來た天文十年代からいふと、新版書であつたから特に注目したものと思はれる。私の晩學書志の上篇には堺版の韻鏡のことを書いておいたから今度は韻鏡初版の享祿元年に出た醫書の方のことを記るしたわけである。なほ序に一言するのは日本一鑑の成つた事は恰も韻鏡の永祿版が堺で出來たその七年であるのも一奇だ。一たい九州乃至山口地方に於ては天文およびその以前に既に數部の刊本があつたのだが鄭氏がそれを指摘しなかつたのは見聞注意の到らざるものがあつたとせねばならぬ。そのくせ鄭氏の著錄した書目には聚分韻略の名が載つてゐる。但し天文八年の大内版や、享祿三年の日向直幸院版につい

ても記るしてない。又明應版の聚分韻略についても延徳（明應）版の大學と共に一語もない。然し四書については先惟論孟乃劉向注となし朱子本旨近有之と附注したのも面白い。繪畫の本には圖繪寶鑑を擧げ本草の本には圖經本草を錄してゐる。最後に兵書に孫武十三篇と武經七書と百將傳とを掲げてある。僅々數十部の書ながら、これを豐後あたりの武家佛刹などの藏書として觀ると私たちに興味が甚だ深いのである。

國書のうちに聖德太子憲法と御成敗事式目とがあるのもふさはしく、字書類に聚分韻略の外には倭名集下學集節用集がみゐる。但し倭名集は倭名鈔のことであらう。歌集には古今集がなくして、萬葉集と金葉集との二つだけが載つてゐる。偶然なことではあらうが、萬葉集があるのはその道の人にとつては聊か注意すべきであらうと思ふ。尤もその次源氏拾遺と源氏後拾遺との二書の名がある所から察すると、これらは拾遺集と後拾遺集とのことで、恐くは源氏物語の名との混同とみてよからう次に少納抄とあるのは恐くは清少納言の枕草子をさすものと思はれる。元來この日本一鑑の著者は學問のあつた人ではなかつたやうで文章も拙劣で文字も杜撰であるし、書名なども和漢の出入なども散見してをり甚だ覺束なく思はれる所が少くないのだから、かくの如き誤謬はもとよりとがめるには當らないのである。

金九經氏

氏は永らく本誌の爲め、編輯及び校正の勞を取られしが、本春芽出度大谷大學卒業の上、家事の都合上歸鮮せられた。

今後、本誌の爲、特別の援助を頂く事となつた。

本誌の發展

來號より京大圖書館笹岡民次郎氏の御盡力に依り、從來より專門家の間に不便を感じられて居た、日本東洋の書史及び解題を、原作者別に依つて每號特別附錄として載せる事になりました。本號のグリツフイス先生の著作目錄抔も、その前衛に過ぎないのであります。

名號不思議

鈴木大拙

念佛宗の人は名號不思議と云ふことを敎へるが、近來益々名字に摩訶不思議の力あることを覺ゑる。單に宗敎の上信仰の上と云ふことでなく、世間万般のことにわたりて、名字、名號名稱なるもの丶、妙な力の籠つて居ることが感知せらる。

早い話が、書物でもその題名の如何で賣高に影響すると云ふではないか。

人間でも、博士とか、學士とか云へば、其名だけで、普通の人よりも、ゑらいと見られて居る。本人は別に何とも思はず、又何にも變りはないのでも、外から何とか、かとか評判する。つまり名の上の評判だ。

官等をつけて正何位とか云つて見給へ、又勳等の上で、一等とか、二等とか差別をつけて見給へ、一等は二等よりもゑらく、正一位は正二位より、公爵は伯爵より、何となく人間が差(ちが)ふやうだ、どこか違ふのかわからぬ、どうしても名の上だけらしい。

昨日まで『おい、君』と言つて居たものが、急に親が死んで、公爵となり貴族院の議員となつた。そうすると、その內を尋ねるにも、何となく敷居が高いやうだ。固よりこちらの思ひなんだ、それでもさう感ずるから仕方がない。名號の不思議は爭さうことが出來ぬ。

ひよつとすると、自分もそんな氣がすることである。わしは士族で、武士の家だ、なんどと考へるとどうも二本の刀が腰にある氣がする。馬鹿な夢だ。

今日は元日だと云ふ、そうすると、どうも芽出度なる。何だかお正月氣分が出る。

『あいつは國賊だ、不忠だ』と名をつけて見給へどこが國賊たり不忠たる所以が、わからぬでも、何

だかうさんな不忠くさい面に、その人が見ゐる。

近頃は無政府主義者だとか、無産者だとか、何だか色々新しい名が出來た。何れも爆裂彈を投げさうな顔付をして居る。

迷信とか云ふもの、根據も此處に在る。名號不思議の原理から出るのだ。六白だとか、友引だとか、佛滅だとか、何とか云ふと、どうも縁起がわるくて仕樣がない。それから又不思議にわるいことが出てくる、續く。いくら理屈で考へてもわからぬ。その中何となく自分も『迷信家』の仲間入をする。人の上を笑ふても、自分の場合は笑はぬ。不思議な名號の中に誰もかも攝取不捨である。

それ故支那人は『必ず名を正しうせん』と云ふ。名さへ見事に出來上れば、仕事は大半、成就したと云ふてよい。名は實の賓と云ふけれど、うそから出たまことも在る、名から却つて實の上ることもある。

政事家は名を貴ぶ。今日も昔もかわらぬ。戰するにしても、議會で喧嘩するにしても、名を正してかゝらぬと負ける。

但その名のつけやうが、政治家の場合などでは、其時の國民の心理に一致するやう取り計らはねばならぬ。

先頃布哇から來た人種學者の人が言つて居た。布哇の土人は自分等の崇拜する神の名を容易に他へ傳へぬと。種族中の年長者は、自分の後繼者を選ぶ前に、色々と宗教上の試錬をやつて、『これなら』と思ふものを見付けると、これを深い森の中へつれて行く、そこでは誰も居ない、自然の光景の如何にも神々しい處で、長老は始めて神の名を若者に教へると云ふことである。今までは神の名を知らなかつたのだ。これを知ると云ふことは、やがて自分と神と合體することであらねばならぬ、名がないとつかみどころがない。

薔薇は何と名づけても、その香にかわりはないとシエキスピヤは云ふ。併し薔薇に外の名をつけると其香も屹度かわつて來る。

哲家者でも名號の創作に腐心する。自分の考を適切に言ひ顯はし得る名詞が見付かると、その組織系體は出來上る。古からの言葉には、それぐの傳說

がついて居る、それで獨創の哲學者は新らしい名をづけて、自分の哲學を組み立てる。
併し獨創な人でないと名を作ることが出來ぬ。それと同樣に、獨創の人であつて始めて名にしばられぬのだ。
教育の目的は、一方では、名號統一のくびかせを若い人々の上に引つかけるに在る。それで取り扱い易くなる。が、他方では名號から自由になるやうに教へこまぬと、人は皆死んで仕舞ふ。
名號の不思議は、殺活自在の働きをする。過は名號にない、殺される方に在るのだ。活人劍を握るやうにせぬと、救はれるかわりに、どこかへ突きおとされる。
書物を讀む上でも矢張りさうだ。
吾等はいつも活きて行くやうにしなくてはならぬ

二人連れの客は大概買はない。
本當に買ふ人は一人が多い。
（店頭感）

杉浦丘園氏の洛北修學院村道しるべ

異屁江生

丹彩色延寶板京都大繪圖を利用した古雅な木版刷表紙に魅せられつゝ先づ贅言を見るに本書は最初修學院村名勝志として現在の修學院村名勝を網羅せんとして編纂せられしものなれども實地踏査を要する個所多く今は假りにその稿本に依つてその一部を割きと舊修學院村のみを以て修學院道しるべと名づけて知友に頒布せられたるものである。
氏が寓居雲泉莊が、比叡の西麓、修學院村に有るに依りその文庫には、修學院に關する、凡ゆる物の、蒐集が行われ居り、僅か古瓦の破片、かの平八茶屋の德利、修學院御幸の觸札、地圖には寬文より大正に至る百二十舖、圖書凡二百種に及んで居る。
修學院村道しるべは此等貴重な文獻を引用し附近の案内記は申すに及ばず神社佛閣の緣記、年中行事に至るまで今と昔の修學院村を照するに極めて親切である。加ふるに幕末に修學院關係の圖書、地圖、器物類の目錄を載せ解說が附せられ居り附錄として雲泉莊の寫眞を挿入したる案内記をも添えてある。
偶々修學院村に遊び離宮拜觀の途次氏が別邸雲泉莊に訪れてこの小冊を手にする者あれば、恐らく氏の蒐集慾が斯くまで有益に利用せられつゝある事に驚かない者はないであろふ。別に修學院村名勝及び資料繪葉書と同解說書が出てゐる，これを併せて看ると興味が一つ深い事を紹介して居く。（二、三、二四）。

特殊の人情本

赤星信一

古書好きの者にとりて一番嬉しい事は、豫てから欲しいと搜し歩いてゐた書籍が、遂に手に入つた場合の心持ちであらうと思ふ。偶然珍書を發見した時も無論愉快極まるものであるが、書名丈け知つてゐて、見たい讀みたいと憧憬れてゐた本を、いよ〳〵自身の手に入れ得た時の悅び、それは實に何物にも譬へがたきものがあるのである。

今から十數年前、ふと私は『梅暦』全部六十冊揃ひの美本を手に入れた事があつた。それが初まりで其後は、低級なやうだが人情本が無闇と好きになつてしまひ、古本屋でゞも、怪しげな骨董店などでも人情本を見つけ出しさへすれば、端本だらうが何だらうが、構ひなく買ふて歸つては、耽讀した時代があつた。その頃（明治四十五年頃）或るH市中の、とある穢い古物店の埃に埋まつてゐたなかゝら、人情本の端本を數冊求めて歸り、例に依つて一々熱心に讀んで行くうち、その一冊のなかに思ひ切つて極端な描寫がしてあるのを發見した。誰でも知る通り一体が人情本といふもの、變に氣を持たせて劣情を唆るやうな場面が、ちよい〳〵出て來るのが特色といへば特色だが、その時の本ではその局所が、殊更めかしく露骨に、精細に描寫してある。書名は『眞情春雨衣』著者名は『東都、吾妻雄兎子戲編』と署してある、その第三編卷之中であつた。其時初めてそんなものを見た私は、サアその前後の部分が讀み度くてしやうがない。またもやその古物店に出掛けて行つて、塵埃のなかを搜し求め、やつとのことで同書の初篇の卷の下を一冊見つけ出した。歸つて早速讀んで見ると、そのなかにも矢張り同じやうな特殊な情景が、一ヶ所描寫せられてある。いよ〳〵以

てこの書全体が讀みたくてたまらぬやうになつたのであつた。

それから熱心に搜して見たが、私の地方では遂にその本に出遇ふ見込がなく、そのうち所用で大阪まで出た際、その以前から少しばかり知つてゐた、或る古本屋の主人に右の事を話したら、その本ならちよい／＼あるから見附けて置きませうと、心易く引き受けて吳れた。そしてその『春雨衣』は三部作のやうなもの丶一部で、外に似寄つた趣向の書で『おぼろ月』と『心のたけ』と、いふのがあるといふ事をも敎へて吳れた。その後は用事で大阪に出る度びその古本屋に寄つて、まだか／＼と催促するが、生憎なもので、その本が一向出ない。二三年も經つてもうとても手に入るまいと大抵諦めかけてゐた頃、その店から三部とも揃ふたのがあつたからと送つて來た。これで永い間待つた効があつて、漸く渇望を醫し得ることになり、貪るやうにして讀ん時の嬉しさは、今でも忘れられないところである。

三部の書名は『眞情春雨衣』一名『春雨衣』、『春情花朧夜』一名『朧月』、『春情心の多氣』一名『心の竹』、各一部は初篇二篇三篇まであつて、各一篇上中下三冊宛より成る。全部で二十七冊であるがその時入手したのは薄葉刷りであつたから、合本して三冊になつてゐた。『春雨衣』及『朧月』の著者は『吾妻雄兎子』とあり、『心の竹』の著者は『女好庵主人』となつてゐる。書物の体裁は中本形の他の人情本と同樣で、各篇二三面の口繪があり、各卷挿畫が二ヶ所ばかりづ丶あるが、圖柄は普通の人情本と同じやうで、別に猥褻がゝつた點は少しもない。それでも之等の書は當初から秘密出版だつたらしく著者も匿名だし、出版元も書いてない。或る人の說によれば吾妻雄兎子といふのは、爲永春水の門人梅亭金鵞だとの事である。『春雨衣』初篇は著者の自序、二篇の序文は午の春志亭嬌賀、三篇の序文は狂訓亭爲永誌とあつて、春水が書いたものと思はれる『朧月』は初二篇は著者の自序、三篇は京女郎半丁といふ人（恐らく同著者）の序文があるが、年號はない。只初篇の序文のなかに『初代春水がものせし粹書云々』の文句があるところから推せば、明かに春水歿後の出版であるに相違ない。『心の竹』の著

者女好庵主人といふのは、筆致から推しても前者とは全然別人らしく、三篇共自序を書いてゐるが、初篇の序に『午の年の永き春の日』とある外、年號は分らない。爲永春水の代表作『梅暦』が、天保三年壬辰に初篇を出し、同十一年の春に『梅見舟』まで完成し、そして同十四年には歿したのから見て、『春雨衣』の二篇に午の春とあり、三篇の序文を春水が書いたとすれば、この午年は天保五年と思はれる。『朧月』は前記の通り、春水歿後と明記してあるが『心の竹』初篇の序文の中に『春雨衣』二篇と同じく午の年の春とあるは、同じ年であるか、又はその十二年後の弘化三年であらうか。

要するにこれ等の書は、その頃人情本が世に持て囃されて、遂に流行の絶頂に達した後、人情本が有する特色を、更に强調して書いて見たものらしく、其うち『春雨衣』は、その構想首尾一貫して、筋の運びに少しも無理がなく、變化もあり、やまもあり確に傑出した作であると思ふ。主人公玉次郎に配するにお春、お染の二美人を以てし、副主人公には勇肌な權太郎に、腰元お杉の外、老若二三の登場人物がそれ〲面白く活躍し、特殊の極端なる場面の描寫を取り去つたとしても、充分面白く讀み了らせるだけのものがある。『おぼろ月』の方は極端なる場面が殆ど連續的に出て來るので、其方面の興味を中心としたものと思へるが、筋は非常に變化に富んで作者の筆力實に端倪すべからざるを覺えしむるものがある。『心の竹』は前二者に比し、作意も文章も遙に落ちて、全体としての行き方は『春雨衣』の程度のものであるが、極端な場面を除けば興味索然たるもので、寧ろ駄作の部類に入るべきものであらう要するに三種共人情本中では特殊のもので、その時代の頽廢的傾向を最も如實に現はしたものとして、相當研究の價値は認めらるべきであらうと思ふ。

書物を丁寧に見る人は大概買ふ、粗雜に見る人は滅多に買はない。本を賞める人は滅多に買はない、けなす人は大概買ふ。

（店頭感）

古今料理文献解題

柳川文詳

▽**四序會席**　これは精進料理の書物であつて、料理本としては、かなり珍らしいものである。私の披見したのは寫本であつて、奥書には、元祿九年松浦某、天明四年久野某、寶暦三年心儘庵、寛政六年鈴木某、天保十二年增田某、と名を列記してあつた。精進の獻立中には、隨分珍らしいものや面倒なものもある樣子であるが、然し故實によらないで出來易いもの丶中で面白い料理方のものもあるといふことが誌され、その實例が擧げてある。

▽**卽席料理**　大阪吉文字屋版である。享和二年版。これは洒落た折本で、竪六寸ばかり横一寸五分位ひである。紙質は泥奉書で、表面には魚類、裏面には精進、末の所に獻立の仕方がある。この體裁の本は、當時は流行したものと見えて、料理以外の本にも隨分あるやうである。

▽**庖丁雜錄**　この本も一寸珍らしいもので、一卷は、獻立のこと、汁は汁、刺身は刺身と區別して詳細に誌されてゐる。次の卷は、酒、甘酒のことが記されてゐる、二卷ものである。

▽**酒古名考**　荒木田久老の著である。酒の古名を考證したもので、卽ち酒は『くし』と云ひたるならんとの說が詳述してある。

▽**蒟蒻栽培調理法**　これは料理本といふよりも、農書といふ方が當つてゐるが、然し、コンニヤク料理のことが詳しく誌されてゐる。この蒟蒻の料理法にも隨分あることがこの本によつて解る。

▽**素人庖丁**　三卷もので、初篇は享和三年、二篇は文化二年、三篇は文政三年の出版で、四ツ切本である。

初篇發行以來、三篇の出る迄には年數の重なつたことを見ても、この書が世間に持囃されたるを知るに充分である。今日から考へると、料理本としては、珍重すべき部に屬すると思ふ。淺野高藏著、河內屋版である。料理の仕方には、隨分面白いものがある。

▽**食物和歌本草**　寛政七年の版で、和歌によんで種々の食品の性質を示したものである。一寸珍らしい。

初篇には獻立及び調理法、二篇には初篇に漏れたもので魚類野菜の調理法及び飯の炊き方、三篇には精進料理の仕方がある。三卷ものである。

▽**庖禮書**　寛政十二年の寫本で、薄葉に誌してある。見返しには金砂子を施し、優美極るものである。第一に鷹狩の篇十七章、數調の篇四十三章、雜飯の篇二十五章、川田の篇十章、組膳の篇三十六章ある。一篇每に、右當家の的傳である。『不器に向つて授く勿れ、赤松越前守信祐同姓兵衛に向つて傳授』と書かれてある。內容は中々珍らしいものである

高須氏の『東洋文藝十六講』を讀みて

擔雪村民

西歐文藝が輸入され出してから、長い間日本の學界や思想界、いな社會全般を支配して來た漢學も、單なる專門學徒の研究資料たるに過ぎなかつたことは、何んと云つても事實である。所がその旺盛を極めた西歐文藝も、今やそのあらゆる方面に於て行きつまり、新しい天地を支那に求めんとする傾向が、著しくなつて來た。近年になつてから創作家や畫家などが、頻々としてその題材を求むべく、支那大陸に旅立つのである。國譯漢文大成だの、支那文學大觀などと云つたやうな叢書は、かゝる氣運に乘じて生れたのである。殊に今までは支那に於いてすら、等閑に附せられてゐた小說戲曲の類が、最近いやにちやほやされるやうになつた。これは西歐文藝の影響と云はねばならぬ。

西歐文藝を味ふのには、是非ともその語學が必要であると同じく、支那文學を理解するにも、やはり支那語や漢文の素養がなければならぬ。ところが今の文士連は、支那文學に對して、多分の興味は持ちながらも、その基礎學を根本からやるといふ、勇氣もなければ、陳腐な漢學に頭を惱ましたり、貴重な時間を空費することを、潔しともしないのである。彼等の望む所は、純文藝的作品にあるのであつて、陳腐な漢學に要はないと云ふ。第一層や第二層は入らないから、第三層樓のみを建てゝくれと云つて、大工を困らせた古の富家翁と、何んの異なる所があらう。要するに空中樓閣を夢みるものである。

それ故偶々專門學徒が、苦心研究の一端を發表したものによつて、その鑑賞慾を充し、尙ほ進んでは、それを種にして變つたものを作り出すと云ふことになる。かくして出來上つたものは、云ふまでも

なく鐘樓の如きもので、屋根こそは立派に見ゐるけれども、全體は空洞である。例へば元曲と云へば漢宮秋、明曲と云へば桃花扇や還魂記などが何時も引合ひに出される。これは云ふまでもなく、漢文大成に國譯があるからである。譯者が選擇の際に、最も優秀なものを擇んだには違ひないけれども、他に優れたものがないと云ふわけでは決してない。これは全く偶然と云はねばならぬ。今假りに元曲で救風塵だの㑳梅香などや、明曲で香嚢記だの紫釵記などが、譯されてあつたとすれば、必らずやこれらのものが、引合に出されたに相違ない。晋唐小說がとやかく云はれるのも、要するにこれに過ぎない。この意味に於て鹽谷博士は、期界の大恩人であり、文士連の印稅で、銅像でも建てねばならぬと云ひたい。

かゝる氣運に乘じて、さすがは目先の鋭い新潮社から、思想文藝講話叢書第二十編として、高須芳次郎氏の東洋文藝十六講を出したことは、その內容如何に拘はらず、誠に時宜を得たものと云はねばならぬ。高須氏の支那文學なり、印度文學なりに對する造詣の深淺は、余の未だ知らざる所であるが、この書の内容を見て、大體想像することが出來る。氏はその自序に於て、

東洋文學の新研究が漸く始められやうとして、初學者が熱心にその大畧を知らうとしてゐることを思ふと、專門的な細心精緻の研究を發表することは暫くこれを他日に讓り、玆には支那文學の全般について、その要領を述べ、傍ら印度文學の鳥瞰觀をざつと記す事とし、新しく組織的に取纏めて見た………。

私は日本書に最善の力をつくし、何人にも東洋文學の骨組たけわかるように講述したつもりであるが、小說戯曲などは、紙數に制限があるので、詳しく紹介し、精細に內容を解剖する處までゆかなかつた。それで、最も簡潔に要領を摑み得るようにして置いたが、果して私の豫期した丈げの効果が得られるかどうか………。

又、例言二三に於て、

迫うて、支那文學、印度文學に就ては精緻な研究を取纏めて公にし、讀者諸氏の一讀を乞ひたいと思ふ。『支那の硬文學』『支那の軟文學』『佛教文學大觀』と云つたやうなものを何れ公にするつもりである。

と云つてゐる。これだけを見れば、如何にも專門學究であると云ふことが、誰にも頷かれやう。のみならず新潮社の本書の廣告文には『支那文學研究の第一人者たる高須氏の苦心の作』として紹介宣傳してゐるではないか。然らばその內容は如何。十六講

四百六十頁もある、かなり大きなものであり、目次だけでも、六號活字二段組みで、二十頁もある。內容は實に豐富と云はねばならぬ。支那文學から云へば、上は上古の三皇五帝唐虞三代より、下は現代の胡適、陳獨秀、周作人、氷心女史に至るまで、無慮一萬何千年間の文學を、抑々の人類の起源や、社會の狀態から述べてゐる。豈文學の骨組みのみならんや、支那の思想史、社會史の骨組みまで、一目瞭然たらしめた感がある。この意味から云へば、この書は傑作と云はねばならぬ。殊にその第十六講、二十三頁內に收められたる、佛敎文學、印度文學の如きは、實にコンデンスの妙を得たものである。

余はあへてその內容の精細な點を、專門的に非難しやうとするのではない。それは氏の專門的な細心精緻の研究を公にされるまで、待つてのことにしやう。只その骨組みの大體について一言したい。從來の支那文學史(古城、笹川、兒島、久保の諸氏)は所謂道學者流に捕はれたと云ふものか、詞曲小說などについては、殆んど述べてゐない。あつたとしても極く簡單である。又詞曲小說を詳しく紹介したもの(森、鹽谷、宮原の諸氏)には、古代を單畧にした。これには自ら理由がある。又支那文學大綱の如く、或る個人々々を紹介したものには、一貫した系統がないと云ふ嫌ひがある。しかしこれは又これとしての目的が、別にあることは勿論である。所がこの本は兩者を調和しやうと、努めたものである。卽ち文學史的に、しかも文學概論的に、一貫した系統ある骨組みを作ることに、氏の努力の跡が見られる。然し結果に於ては、遺憾ながら滿足に成功したとは云へない。

大體の骨組みから見て、紙數の制限を苦にせられる氏が、しかも別に『東洋思想十六講』の著があると云はれる氏が、こゝでは純文藝を紹介しやうとしながら、文藝品として大した價値も認められない、唐虞三代とか先秦諸子など、所謂上古文學なるものに、紙數の大半を費したと云ふことは、理解に苦しむ點である。成程後世に發達した文學の根源が、先秦古代にあるとしても、後世の純文藝的作品を疎畧にしてまで、古代ばかりを穿鑿する必要があるだらうか。根が太り葉が茂らなければ、花が大きくなら

ないのも道理ではあるが、花を好む園藝家や盆栽家は、花を大きくする爲めに、根を切つたり葉を摘んだりすることも、忘れてはならない。紙數の配當からして見當が違つてゐる。專門的の細心緻密な研究を、發表する自信がある氏ならば、上古を畧してゞも、現代の誰しもが知りたがつてゐる、小說戲曲の方を、も少し詳細に紹介して欲しかつたのである。所が氏の紹介された小說戲曲は、最も簡潔に要領を掴み得たかは知らないが、兎に角今迄他の諸氏によつて、發表されてゐる範圍を越ゐてゐない。又三皇五帝とか唐虞三代など、全く傳說的なものまでを、極めて常識的に（今の常識はこれを認めない　純朴な古代支那人の常識）何等の異論もなく、素直に取り上げた氏が、時には中庸や大學が先秦の作ではなく、漢代の作であらうとか、漢代の小說は六朝人の作であるとかなどと、稍々專門家らしい考證を試みたりしたことは、繁簡宜しきを得てゐない。手當り次第に人の著述から、無批判に寫し取つたとすれば兎に角も、一貫した自己の見地を有し、しかも系統的に組織的に、一人の手で書かれたものとしては、どうしても首肯され難い所がある。

骨組みの話からして、稍々細微な點に入ることになるが、氏は第五講の（五）屈原の辭賦の條に於て、

> 純文學的に見ると、支那文學史は、屈原の賦、莊士の文を以て幕を開き、漢代の賦、六朝の駢儷、唐の詩、宋の詞、元の曲を以て飾られてゐるともいふべきである。

と、支那文學の骨組みを、明白に宣言して置きながら、第十三講の（一）宋代文學の特色の條に於ては、

> 要するに、宋代の文學は詩歌の上に於て振はなかつたが、散文殊に政治文學や哲學的な文藝の上で、唐代に匹敵すべき盛況を示した。

と云つて、氏の先に宣言された、支那文學史を飾つてゐるものゝ一たる、宋の詞については、全く忘却されたのである。氏の所謂詩歌と云ふのは、果して何を指すのであるか、律詩や絶句のみが、必らずしも詩歌の全體ではあるまい。『井水ある處、柳永の詞を歌はざるはなし』とまで云はれた所の柳耆卿や周美成などの詞（詩餘）は何時何處で紹介されるつもりなのか知らぬ。これも專門的な細心精緻の研究發表を、待たねばならぬのか知らぬ。これもやはり紙數に制限されて、書けなかつたとは、よもや云は

れまい。同じ頁に、

> 詞餘といふものが詩以外に發達し、五言、七言の形式に拘泥しないで、俗曲で思想を述べるやうになつた。それがやがて劇の發達を促がすべき先驅となつたのである。

と云ふに至つては、茫然失笑せざるを得ない。こゝらが云はゞ、專門家振る素人の悲哀である。詞餘とあるのは詩餘の誤りであらう。若くは餘の字は餘分である。北京の吳梅氏が、詞餘講義など丶云ふ本を書いて、戯曲の代りに詞餘と云ふ字を使つた例はあるが、詩餘卽ち塡詞のことを、詞餘と云つた例は聞かない。それは兎に角として、俗語で思想を述べると云ふ定義は、實に振つたものである。成程詩餘の中には、俗語で書かれたものがないでもないが、それは詞全體から見れば、極く少部分に過ぎない。詞と曲との中間文學である所の、套數とか、小令（曲の）とかには、比較的俗語で書かれたものが多いけれども、これは恐らく氏、いなこの本の著者の如き人の、知り得る圏外のものであらう。兎に角宋詞は俗語が主ではない。

更に同講の（一〇）代表的戯曲『西廂記』と『漢宮秋』の條に於て、

> 樂曲は元來、詞——五七言四句の短章を字句上伸縮して、緩急抑揚の調子を付けて歌ふ——から起つたもので、塡詞——聲調が伸びたり詰つたりした通りに譜を按じて字を塡めること——の法則によつて成る。それが宋代に入つて旺んになり、南北二派にわかれて對峙した。南方は周邦彥、柳耆卿の一派で詞や調子の流麗なるを主としたが、北派は蘇東坡らが率ゐて豪放を旨とした。詞は宋代文學の一特色を爲すものである。そして詞が一轉して元曲となり、前代に見ない盛況を呈したのである…。

と、今度は詞の定義が、又前とは變つて來た。所謂五七言四句の短章とは、何を見て云ふたことか。南北二派說は何を標準にし、何を根據としての分類であるか。又同頁に、

> 當時劇曲に北曲、南曲の名稱を生じたのは、宋の樂曲が分流したわけで、卽ちそれが南宋から金に輸入されると、元代に傳はつて北曲となり、今一つ江南に流れ入つたものが元の末期から明に亙つて普及し、南曲となつたのである……。

とかるが、これがこの頃やかましく云はれてゐる元曲と明曲とに對しての、氏の簡潔にして要領を摑んだつもりの、說明である。誠に簡潔ではあるが、又實に曖昧である。どこが北曲と南曲との相違であり又各々の特長は一體どこにあるのだか、著者程の天

才でもなければ、この文を讀んだだけでは知る術もない。元曲が四折に制限され、正末のみに歌はせのる對して、明曲では齣數に制限がなく自由であり、各色が皆歌つたり、或は合唱したりする所に、それ〴〵の特色があり、又北曲では必らず、一折は同一宮調で通したものを、南曲になる同じ齣の中にも、いくつかの宮調を排し得ると云ふ相違があることを、この本の著者は果して知つてゐたのかどうか。知つてはゐたけれども、骨組みには必要ないと認められたのか。それともやはり紙數の制限の爲めに、止むを得ず割愛されたのかどうか。

兎に角、大江東に去ると云つて、高らかに歌つた、蘇軾の詞的生活の一面や、東坡をして『山抹微雲秦博士、露花倒影柳屯田』と云はしめた、秦少游や柳三變の詞を知らないとすれば、宋代の文學を語る資格はないと云つてもよい。詞を知らずして曲を語るとは、持つての外である。晩唐以後の詞集は、その分量に於ても、決して唐詩に劣らないであらう。折角唐宋の間に挾まれた、五代と云ふ過渡期があることに氣がつきながら、あたらその社會の爭亂にのみ氣を取られて、蜀や南唐に特筆すべき文學があり、花間、尊前の如き名詞集があることを忘れたのは、氏の爲めに大に惜む所である。殊に今日の日本に於て今までの詩が、その形式に於て行きつまり、と云つて自由詩や散文詩は、その律格のないことに慊らず、新天地を開拓せんとして、苦しんでゐる現詩壇の爲めに、自由な表現をしながらも、一定の律格を保つて圓滿完全に新天地を開拓した、詩餘の發達史を紹介したものなら、單に初學者のみならず、既成詩壇に於てさへ、如何ばかり益する所があつたことであらう。所が失禮ながら、この本の著者には、詩餘についての知識がなかつたのである。敢へて高須氏と云はない。

今一つ、氏は例を擧げるのに、悉く日本文に譯してある。これ或は初學者に解り易からしめる爲めの、著者の親切であるかも知らないが、支那の詩などで、四言とか五言、七言とか云ふのは、その形式が大切である。全部を譯してしまつては、どれが四言であるか、五言であるか、將又七言であるか、全く見當がつかず、無意味になつてしまふ。親切があ

れば對譯すべきで、紙數が不足すれば、傍へ振假名でもつければよい。殊に戯曲の如きは、科とか白とか曲とか云ふ形式に特色がある。いくら簡潔な要領を貴ぶ世の中とは云へ、簡單な筋書だけでは、曲の特色が解らぬ。小説の梗概も曲の筋書も、何等區別がなくなつてしまふ。

文學は思想も必要だが、あくまで形式を尊ばねばならぬ。元曲なら一折、明曲なら一齣でもよいから、やはり原形のまゝ忠實に譯した、原作の場面を紹介した方が、遙かに功があると思ふ。自身譯が出來ないとか、又譯してゐる暇がないなら、誰かの名譯を引用して、その出典を書けばよい。西洋文學を紹介する人などにも、よく見る例ではないか。

專門的立場からの穿鑿は、しないことに宣言したから、それはよしにしても、骨組みについての大體が、ざつとこの通りである。中に先秦思想を、印度系と非印度系に分けて、老莊を印度思想の影響によるものだとした所などは、氏の獨特の見地からの新研究らしいけれども、これ要するに、老子化胡經などで、釋迦は老子の化身だと云つたり、成吉思汗は源義經也と云ふ本を出して、一時一部の人を騒がした如き類である。要するにこの書の内容を見ては、書物禮讃の張本人たる余も、遺憾ながらこの書物だけは、禮讃する氣にはなれない。約言すれば、生れなくてもよかつた書物であるといへる。從つて新潮社も、その時を得て、人を得なかつたやうな感じがする。

最後に、これは餘談であるが、相變らず誤植の多いことである。殊に人名の誤植だけは看過するわけにゆかぬ。丁度電話番號帳の數字が、誤植されて居つたら、電話が通じないやうに、人名が違つては何にもならぬ。參考までに目についたものを少し擧げて見やう。

°庾信、°庾肩吾が瘦信、瘦肩吾に、

°服虔が服處に　°枚乘が放乘に

°傅玄が傳玄に、　°阮瑀が阮璃に

°謝惠連が謝惠遠に　°喬夢符が喬夢村に

°尤侗が尤個に　°盧同が慮同に

°鍾惺が鍾憬に　°侯方域が侯方城に

°龔自珍が襲自珍に　°譚元春が潭元春に

　朱彝尊が朱彝に
など、ざつと擧げてもこの通りである。これは勿論人名の誤植だけであるが、いくら活字本でもあり、間違ひ易い字であるとはいへ、餘りにも酷いと云はねばならぬ。この有樣では、安心して本も讀めず、勿論これから引用するなどは、實に危險千萬ではないか。これを一見して誤りであると解る人には、この本を讀む必要はない。この本でも讀まねば解らぬ程度の人は、誤りのまゝ覺えて了ふことになる。立派な單行本である以上、ありふれた雜誌類とは違ふ。どこまでも著者が責任を持たねばならぬ。著者がもしも再閲の時に、これらの誤植に氣がついたとしたら、責任上からしても、讀者に對する、禮儀や親切からしても、早速正誤表でも作つて配るべきが、良心ある作家の當然の道ではないか。まさかこの位の誤植に氣がつかない程の、素人でもあるまいと思ふから。しかしこの本が出てから、茲に半歳、未だ正誤表あるを聞かない。

（二、二、二〇）

朝寢坊と家庭の平和

本誌の名づけ親である新村博士は、正月の或る日、內藤博士の宅で、頻りに朝寢坊の宣傳をして曰く、家庭の平和は朝寢坊によつて保たれる。太陽が昇れば起きんならぬものと思つてゐるのは、日本人の永い間の惡い習慣である。佛蘭西では午後の五時頃から學校が始まり、支那人は十二時にならねば起床しないと、東西の實例を擧げて居られた。博士にして始めてこの言ありと、全く感心して謹聽した。

轉載申込

拜啓書物禮讃第五に掲載相成居候鈴木大拙氏の『机上古本一册』全文を本館々報に轉載いたし度候間御快諾下され候樣御取斗下され候鈴木氏の宿所不明につき甚勝手ながら御願ひ申し入り右御願旁得貴意斯如に御座候　拜具

昭和二年一月十四日

前橋市立圖書館　司書

佐藤錠太郎

支那の一般讀者はドンなものを讀むか

上田恭輔

支那は古來上下の間に著しく懸隔のある國である讀書人てふ一階級を形成して居つただけに、四億と稱する大民衆の十中の八九は殆ど皆、眼に一丁字をだに識らないものばかりであつた。それが中華民國以來、教育機關の發達と西洋風の學問の急激なる普及と相俟つて、青年男女で字の讀めないものは無い位の大々的の進歩を遂げた。

普通教育の蔓延と共に、從來の純學究風の學者らしい學者が漸次無くなつて來た。若手で歐亞兩道の學問に精通した者も無いではないが、大抵この手合は、昔風の學者の得意の藝道とも言ふべき詩がつくれぬ。書ときては日本人よりもマヅイ字を書くものが多い。中等學校以上の學生なども、英書をヨリ良く讀みこなすが、經書となればギリシャ語以上の難物である。レッグ先生の英譯漢文大系の手引で、論語、孟子を解讀して居るのもある位である。況んな詩、書、易などの古典となれば、依然老人組の舊式學者の獨舞臺である。恐らくは經書を理解しうるは本家よりは日本人の方が多いかも知れぬ。ソンな情況であるから現今中國の讀書界に愛讀されるものも從つて頗る低級なものが多い。何の國でも同じことだが、やはり一番多數の人に讀まれるのは小說である。然し小說でも、昔風の時文の水滸傳、三國志、紅樓夢なども今の若い者には判讀出來なくなつたものと見えて、當今の本屋の廣告には、次の様な書目の新刊ものがある。

新式標點符號　水滸傳
同　三國志
同　紅樓夢
同　西遊記

新式標點符號　儒林外史
同　今古奇觀
同　何々
同　何々

勿論、舊式の石版細字の、封神傳、聊齋誌異、鏡花緣、西廂記、琵琶記、桃花扇などが水滸傳、三國志と共に露店に鬻がれては居るも、これは主として舊式の寺子屋風の私塾で育つた連中が、芝居の筋書と一所に愛讀するもので、當世風の新教育を受けた學生は、少しも之を顧みない。それならば今日の支那の新人はドンなものを愛讀するかと言へば、お互に漏れず、講談物の『武俠小說』か、デカタン式の軟文の『香豔小說』若くば『偵探小說』の類が尤も旺んである。その武士道小說で廣く讀れるものに、

江湖小俠傳
山東響馬傳
近代俠義英雄傳
江湖奇俠傳（七册續き）

などで、殆ど皆馬賊若くば自稱義賊傳である。支那に綠林の徒の絕ゑないのは無理はない。先年所謂洛陽の紙價を高くした『紅髯子』卽ち滿洲著名馬賊傳中には、銀鞍白馬張と題して張作霖の馬賊時代の武勇傳があり、それが甚だ痛快な面白いものであつたから、私輩が試に之をある雜誌々上で紹介した所、爾來同本は賣買を嚴禁せられ、近頃は古本も中々手に入らぬ樣になつた。その外に

雍正游俠傳　江湖劍客傳
劍聲花景　八劍十六俠
古今義俠奇觀　淸代劍俠大觀
百俠英雄傳　紅粉奇俠傳
俠女情仇記　俠義鴛鴦
紅玉秘記　孝女報恩記

など右に類したものが澤山あつて、昨今の東京大阪の大新聞に連載するチョン髷ものよりは遙に面白い

新式の軟派ものには

風流豔史　閨房趣史
侍兒豔史　私房秘記
相思日記　惡晚娘
黑心婦　醜漢奇遇
癡女殉犬　妓女守節

尼姑生子	婦女智囊
新婚趣話	陳二小姐
葉少奶奶	紅二太太
一女四爺娘	四海豔史
嫁後光陰	情之素
紅涙影	紅粉地獄
電話奇緣	三十六鴛鴦
牆外桃花記	恨海
情血	

など無限無數の新刊が續出するが、大抵はパンフレット式の薄ペラな單行本で、題目通のツマラヌ俗作のもののみならず、多くは羊頭を揭げて狗肉を賣る挑發的のものばかりである。而してこれら新小說の作家で著名なる人士に

海鳴。獨鶴。西神。禹鍾。瞻廬。叔鸞。梟呆。紅蕉。舍我。枕緣。

などがあることを書き添へておく。

右の外に概して洋行歸の新人の手になつたもので小說兼隨筆風のもので相當に名聲を博したものに次の様なものが、一讀の價値あるものと認める。

歇浦潮	留東新史
九尾龜	廿年目覩怪現狀
自由花範	人肉市場
老殘遊記	黑幕大觀
婦女騙局大觀	三十六黨秘史
桃花運	留學生現狀記
自由女現形記	

など此種のものが無限にある。之に類して『時事小說』と題して、何か一事變の發生毎に、忽ち之に關する單行本が出版され而も之が目睫の間に支那全土に配本される。その迅速なることは日刊新聞の報道の様に早い。先年、李純が殺されたのか、或は自殺したのか知らないが、兎に角この名物將軍の死んでから約一週間目に『李純秘記』が出版された。第一奉直戰の開始と共に『奉直大秘密』が發刊され、二回に吳佩孚が敗戰すれば、直に『第二次奉直大戰記』と共に『吳佩孚之現狀』が出た。

現代之張作霖	馮玉祥全史
段祺瑞歷史	北京政變記
宣統末路	

などは、その事變の都度旬日を俟たずして出版された。特に最も迅速であつたものは、盧永祥が敗戰した翌々日あたりに『江浙大戰記』が發行された。惟ふに支那の南方人はキワものにかけては確に天下一品である。

少年男女學生の間に耽讀される偵探もの所謂探偵小說には、やはり

鐵假面　金剛鑽
秘中秘　鍾聲
白面狐　美人手
老虎黨　情魔

などの外に

中國福爾摩斯全集　百件奇案大觀
情場偵探案　不可思議
此中秘密　怪家庭
奇怪盜　情人

など無暗に澤山あるが、實は、昔の支那の探偵小說言はゞ大岡政談の種本となつて居る。濟公傳（十九集續きの大冊）彭公案。施公案。包公案。奇案大觀斷獄奇案。などの方が遙に面白い。

次に昔の支那を識つて居る外國人に著しき衝動を與へられることは、近年の出版物中兒童向の讀物が俄に增激したことである。日本も御同樣であるが、我國には支那とは違ふてカナと言ふアルハベツトがあつたから、德川時代既に繪本の平假名の赤本があり、源氏物語、倭文庫釋迦八相記、白縫物語、八犬傳などの大冊物があり、偐假名手本忠臣藏いろは文庫を始めとして無數の人情本が出版せられ、無學の幼年者にも判讀出來る樣に、物語ものは悉く振假名兼解釋つきであつた。然し支那ではソウはゆかなかつた。兒童が『英雄小八義』又は『九義十八俠』『七俠五義』などの演義ものを讀み始めるまでは實に容易ならぬ努力と時日を要した。少くとも數千と言ふ多數の文字を覺えねばならず、且また文字を會得した所で意義が判明せない。早く言へば、昔の支那の小供は大人と同じものを讀まされて居つたのである之に反して近代支那全土に亘つて普通教育が發達したのと、且は白話と稱して言文一致體の文章が行はれ、文章に句點を付ける樣になつたが爲めに、忽ち兒童向の出版物が廣く行はれる樣になつた。無論こ

れも主として南方支那の實況であつて、北支那乃至滿洲邊の兒童の讀書力は頗る低級であり、同時に新刊物をドシ／＼買ふだけの資力も無い。

さて兒童向で大に行はれて居る書物としては、先づ次の様なものがある。

兒童故事　兒童物語
兒童新話　兒童神話
兒童傳記　兒童遊記
兒童歌謠　兒童皷詞
繪圖小遊戲　繪圖小魔術
同　小迷語　同　小劇本
同　小笑話　兒童文庫
童話大觀　童謠大觀
兒童智識讀本

その他色々あるが、殆ど日本の出版物を眞似た様なもので恐くは、日本留學戻りの新人の片手間の仕事であらうと思ふ。

我國の警視廳で如何に警戒しても、相變らずやつて居る如くに詐僞的の廣告で地方人の金を捲きあげる如何はしい出版物も相當にある。支那では此種のものに所謂『謀畧奇書』なるものと、他に『秘本』と言ふ題目で青春の男女の劣情を唆すものが多い。前者には

百件奇謀全書　四大奇謀全書
中華武術秘傳　四大奇能秘訣
惡訟師謝方樽奇謀　天下第一奇書

などあり、後者には

對待婦女妙術　潘金蓮秘史
閻婆惜秘史　賈素貞秘史

曰く何秘史、何秘史などゝ麗々しく廣告してあるが無論悉く田舍者を釣る野師の仕事であるにも拘らず、別段警察でも注目して居らぬ樣子である。然し古來著名の性慾方面の名著は、近年風紀警察の監監が彌々よ嚴重となつて、例の『肉布團』『痴婆子』『金瓶梅』『和尚奇談』『杏花天』『牡丹緣』『桃花菴』『意外緣』などは、殆ど皆露店から姿を匿して仕舞ふた。

（一月二十三日）

グ氏の日本に對する熱愛

中瀬古六郎

グリフイス氏が慶應二年始めて二人の日本學生をニウジャージー州のラットガース大學にて世話し始められて以來、前後六十一年間を通じて、其熱愛を日本に捧げられて終始變りなきは、寔に驚嘆すべきことである。氏は明治七年を以て米國に歸へられたけれども、其心は常に日本にあり、其舌と筆とを以て、日本の文物を紹介し、日本に關する誤解を正し、新日本の精神を説明して、五十二年間倦むことを知らなかつたのである。氏は何故に斯くも日本を愛せらるゝのであらうか。私は之を考へて見度い。

第一には、氏は善良なる家庭に生れ、高尙なる博愛主義の雰圍氣中に生長したことは勿論、豫て支那貿易に從事したる祖父よりも兒供心に東洋の事をおとぎ噺的に聞き居たる折柄、特に其八歲の時吾家の石炭を積みおろしする波止場にて、日本開國の談判に近く出帆せんとする、水師提督ペルリの旗艦サスケハンナ號の進水式を見たる事などは、彼の幼き敏感性の頭腦に深き印象を與へたものと思ふ。長じて十八歲の時フイラデルフイアに於て（萬延元年）幕府の海外諸國に送りたる初めての全權委員等の一行を見たることは、益々日本に對する深き愛着心の潜在意識を作つたものであらう。

第二には、慶應二年以後幕府及各藩よりの米國留學生中ラットガース大學に來られる數百のもの、特に横井平四郎の甥の二人及岩倉公の子息等の家庭教師を勤むるようになつてからは、一層日本人の氣概、義侠心、愛國心より、地理等によつて、已れが胸奧中に高鳴りして鼓吹しつゝあるピウリタンの精神氣魄にピッタリ共鳴相應するものあるを感ぜずに居られなかつたであらう。

第三には、明治維新の五ケ條の御誓文（Chater Oath）に基き『宏く智識を世界に求』むるの趣旨を以て、福井藩主松平侯より、『米國の制度に則りて學校を組織し、自然科學を教授すること』の依頼を受くるに及んでは、彼は恐らくは勇躍禁ずる能はざるものがあつたであらう。時に明治三年十月、氏が滿二十七歲になつて間もなき頃であつた。氏が欝勃なる冒險心と、好奇心とは、氏の博愛心と宗教心とに共鳴して、直に此招待に應じ、翌十一月には既に鄕關を去つて、萬里の鵬程に上つたのである。

第四には、明治三年十二月末を以て、あこがれの日本に着くや、風光文物、悉く珍、悉く奇。而も是れ、何等の泰西文化の影響によらずして、全然獨自固有の新文化の發現開展せるもの。其國民智能の底力の勇大なると、其政府要路者の識見の卓拔なるに敬服したであらう。況んや、直に東京に赴き副島種臣、大隅重信等の如き血氣

に滿ち理想に燃ゆる偉丈夫と會見して、其氣焔と抱負を相交換した時などは、日本國の前途に對し、計るべからざる期待と希望とを滿へざるを得なかつたであらう。一方當時東京駐劄の米國公使としては、日本及日本人に對し驚くべき理解を有したるタウンセンド・ハリス氏の如き外交界稀に見る千古の偉人が居つた以上、其エンスーシアズムが期せずして自ら相共鳴したであらう。

第五には、明治維新前後吾國に來て居つた、外國人中には、今日と比べて遙に卓絶せる人格と、見識と、研究心と、義侠心とを具へた人物が多くあつた事を思はねばならぬ。英國公使館にはアーネストサトウ氏の如き、アストン氏の如き、後に有數の東洋學者となつた人が居り。米國宣教師中にはフルベツキ氏の如き、ヘボン氏の如き、ブラウン氏の如き、露國宣教師中にはニコライ師の如き、是れ皆燃ゆるが如き信仰と、燒くが如き愛情と、深遠なる學才とを兼ね具へたる人々であつた。維新の際函館の英國領事をして居つたウイリス氏の如きは、官職を辭して鹿兒島に降り其處に海軍々醫學校の基礎を据へたのであつた。明治開國の初めに於て斯の如き優良なる多くの外國人を有したる事は寔に幸福な事であつた。グリツフィス氏が此の如き環境の下に越前福井の處女地に入り、新式教育に處女的施設を試みられ、其蒔きたる種が萠へ出で、後年終に花となり實となるを親しく觀られたのである。其喜悦と希望とは察するに餘りあるべきものがある。

最後に最も大切なることは、グ氏が明治の初年屢々明治天皇陛下に拜謁して、其眞に叡聖文武古今に卓絶せる御聖徳を仰ぎ、特に當時少壯有爲の意氣に富ませらるゝ其御謦咳に接しては『宏く智識を世界に求め』玉ふ深奥なる大御意に感奮激發さるゝを禁じ得なかつたであらう。又グ氏の姉なるマーガレツト・クラーク・グリツフィス孃も當時唯一の官立竹橋女學校教頭に任ぜられ、屢々明治皇后陛下の行啓を仰ぎて天顏に咫尺し、其吾國女性の向上發展に終始震襟を惱ませらるゝを拜察しては、敢て至誠を傾盡して外臣の微衷を渇さんとの決意を興したのは誠にさもさるべき事と思はる。（終）

ロンドンの料理

本誌と深い關係のあつた。矢野峯人氏は、最近ロンドンから、京大教授クラーク氏に手紙を寄せて、ロンドン食事は、餘りに御上品で、分量が少ないから、氏の如き暴食漢には、いつもアキタラナイと苦情を申し込んで來たそうだが、クラーク氏これに答へて曰く、矢野君は滋養に富んだ少量の料理が、文化人の體質に適することを知らないのだと。然し矢野氏にしても料理には不滿があるかも知らないが、年來渇望せられた、英文學の御馳走にはタントありつけたわけだから、さぞ御滿足であらう。遠くから羨しい次第である。

北條氏直時代諺留

藤井紫影

俚言集覽を使用する人は、所々に北條氏直時代諺留として引用せるを發見するであらう。私は諺語辭典の編纂に當り、この原本を見たいと思ひ、種々搜索の末やうやく東京大學の圖書館で見つけた。總紙數六枚、半紙の寫本で、卷首に淺草文庫と和學講談所との印がある。

先年の大震災でこの書も燒失したらうと思ふから、私が寫して置いたものをそのまゝ茲に掲げて復活復製することにする。

× × × × × ×

北條氏直ノ時分ノ諺思合する事ども多キ故ニ書留之

一、火と下人は身ニそふかたき

一、二ッ子をなすとも女ニ心ゆるすな

一、女の言きくべからず

一、下々を士に取立ぬもの也

一、明ル空ニハゆくべし暮るゝそらニハ行べからず

一、夜みち川だちばかがする

一、とをきは花のか
一、したしき中に禮有り
一、人のなさけは身のあだ人のつらきは身の寶
一、すく道よりやぶる
一、したしき中はとをくなる
一、物いはじ父はながらの橋柱
一、おごる物久しからず
一、慾にはいたゞきなし
一、勝てかぶとの緒をしめよ
一、かてばまくる
一、人とちぎらばよく見てかたれ
一、うちわくづし
一、ひいきたをし
一、三つ子に習てあきさ瀬をわたる
一、正直は一旦ノゑこニあらざれども終に日月のあはれみをかふむる
一、食はひつじのをさゝるのかしらをせよ
一、いらんはみれんのさう
一、かんにんは万寶にかへがたし

一、さしあたる身の事ばかり思へたゞしらぬ行末かへらぬむかし
一、かくす事はせぬがよひ
一、上なみそ
一、身のほごをしれ
一、うはさいへばぬしくる
一、あくのうらはせん
一、鷲はたちてのあとにごさぬ
一、かきにみゝ有り
一、今日は人の身の上あすはわが身の上
一、しらぬ人の行末
一、人を思ふは身を思ふ人をにくむは身をにくむ
一、能ある鷹は爪かくす
一、慾のくまたか爪をさく
一、かわゆき子には旅させよ
一、おやはまぶりの神
一、一心万寶
一、万能一心
一、三尺さつて師の影をふまず

一、寶は身のあだ

一、物ほしがあれば人きらふ

一、我身よければ人わるひ

一、我身つめつて人のいたさをしれ

一、ぜんあくは友による

一、氏よりそだち

一、ちりつもつて山となる

一、せつない時の神たのみ

一、慈悲のふち

一、身にまさる寶なし

一、人はかげが大事

一、人はみめよりたゞこゝろ

一、さいくはりう／＼しあげをみよ

一、馬に騎てみよ人にそふてみよ

一、好事もなきにはしかず

一、花多ければ實少なし

一、やくに立ずの門たち

一、たくらだねこのとなりありき

一、かふばりつよふて家たをす
一、りもこふずれば非の一ばん
一、はやかろふわるかろふおそかろふよかろふやすかろふわるかろふたかかろふ
よかろふ
一、壹文おしみの百ぞん
一、やす物の錢うしない
一、くせある馬にのり有り
一、にがひしやくにもとりゑ有
一、いそげばまわる
一、かゑるのぐわんだて
一、長者の万燈より貧女の一燈
一、長者のはぎにみそをぬる
一、釋迦に心經
一、聞にくき物世になし者の先祖ばなし
一、さまくゞりのぶへんばなし
一、町人の武士ばなし
一、法師のいくさばなし
一、しらぬ京物がたり

一、夫あればおやわする
一、きりんも老ぬればざばにおとる
一、年よれば犬もあなどる
一、むかしのつるぎ今のな刀
一、正宗もやき落ればくぎのあたい
一、ふる札と年寄親は置所がなひ
一、中流に舟を失へば一瓢も千金
一、長居する鷺引目に逢ふ
一、ふろさ客とはたつたがよひ
一、用ある時の地藏顏用なき時のゑんま顏
一、さまり旅人朝旅人
一、樂するわるかろふ苦をするよかろふ
一、夜長ければ夢みる
一、知らぬ神にたゝりなし
一、朱にまじわれば赤くなる
一、水清ふして魚すまず
一、窮鼠反て猫をかむ
一、能なしの口たゝき

一、物いわずのはや細工
一、身しらずの口たゝき
一、かせぐにびんぼふおひつかず
一、恩知らずはこじきのざう
一、おんほうじは出世のさう
一、うしろぐらければしりもちつく
一、うしろぐらひは鬼のゑじき

右北條氏直朝臣の比申はやりたる諺の一帖は元本物茂卿先生の父蓬庵主人自筆のよしにて甚々古雅の一冊也今不斗而堀口氏率貞の藏本を見る事を得たりよつて是を乞需てその文を本の儘に寫しぬしかはあれごかの元本古雅の墨痕は予が禿筆に不叶事共也無念なる次第と云へごもさらにせんかたなし

安永二癸巳首夏廿六日　　多賀氏常政誌之

右古諺の記は多賀翁之藏本を以て寫之畢

寛政二年四月廿四日　　藤原(?)誌

× × × × × × ×

多賀常政は幕士の蒐書家で、蜀山人の一話一言にもその書目が見ゑてをる。再寫した人名の原の字は少しくよみにくい、厚のやうにも見ゐるので疑を存する。(昭和二、一、二)

明治初年に於ける京都出版書目（前號の續き）

白水生

明治元年之部補遺

書目	著者等	册數	書肆	出版免許日附
繪本慶元浪花軍記 初篇下帙			井上治兵衛	九月廿五日
拙堂會話		二册	丁字屋榮助	同上
籠中追記南山踏雲錄		一册	村上勘右衞門	九月廿八日
東巡日誌　第一		一册	村上勘兵衛	九月廿九日
官員錄		一册	同上	同上
歩兵操練圖解		二册	松屋久兵衛	十月七日
校正　草茅危言		一册	近江屋佐太郎	同上
烈婦傳		一册	吉野屋甚助	同上
不恤緯		一册	同上	同上
相國寺　戰死墳塋圖		一枚	小川彦九郎	同上
校正幽囚錄	草吉田松陰著	一册	吉野屋甚助	同上
三策		一册	吉野屋甚助	十月七日
名所栞	村上忠順	十一册	松田屋幸助	十一月四日
嵯峨野集	同上	二册	同上	同上
興風集	吉田寅次郎著 松下邨塾藏板	一册	田中治兵衛	同上
武教講錄		二册	吉野屋甚助	同上
清狂詩抄		一册	田中屋治兵衛	同上
聖蹟圖志	平塚飄齋著	二册	越後屋治兵衛	同上
首注陵墓一□揃	同上	一册	同上	同上
貨幣度量考	城州六合魁民瓜生三寅撰	一册	丁子屋榮助	十一月廿五日
交通起源卷之一	同上	一册	同上	同上
有不爲齋叢書之内 修靜菴遺稿		一册	吉野屋甚助	同上
有不爲齋叢書之内 讀史偶論		一册	同上	同上
責面話草		六册	近江屋佐太郎	同上
草茅危言摘議	中井竹山著	五册	同上	同上

皇和表忠錄		一冊	吉野屋甚助	十一月廿五日
四書	道春點	十冊	菱屋卯助	同上
政談	物茂卿著	四冊	同上	同上
天明錄	肥前正司考祺述	四冊	同上	同上
海人能かる藻	蓮月尼	一冊	堺屋仁兵衛	同上
蓮月式部二女和歌集		一冊	同上	同上
歩操新書	南越兵學所藏板	五冊	丁子屋榮助	同上
奇文欣賞	大槻磐溪評	一冊	同上	同上
日新通志			著屋幸七	同上
擊壌錄	木内龍山著	四冊	越後屋治兵衛	同上
山陽詩註	富岡鐵齋著	六冊	村上勘右衛門	同上
掌中和歌古の山婦美 一名和歌母子草		一冊	著屋宗八	同上
天恩奉戴錄	威力院義導		丁子屋利兵衛	同上
日誌必用法布令字引		一冊	村上勘右衛門	同上
經濟錄		二冊	著屋嘉助	同上
佛山堂詩鈔貳編	豐前村上剛大著	三冊	丁子屋榮助	十二月廿六日
兵家必用		一冊	田中屋治助	同上
日本詠史新樂府	豐後海棠窩主人著	一冊	同上	同上
講孟劄記	藤田虎之助著	一冊	同上	同上

明治二年之部

書名	著者等	冊數	書肆	出版免許日附
櫁之落葉	京都糸屋長左衛門著	二冊	堺屋仁兵衛	三月四日
民間急救療法	廣瀬元周著 同藏版	二冊	松田屋幸助	同上
東宮勸續錄	鳴瀧妙光寺著同藏版	二冊	田中屋治兵衛	三月四日
英國戰略	對州山口繁藏述	一冊	丁子屋榮助	同上
三誓偽宣唱錄	勢州亀山法周寺述	三冊	菱屋左五郎	同上
振氣論	攝津春荘冗史著	三冊	丁字屋榮助	同上
四書	富小路三條上ル 神山改點	四冊	菊屋七郎兵衛	同上
飼鳥必用	洛西武田栗原七郎著	一冊	村上勘左衛門	同上
和譯英辭書	薩州前田張安より賣弘方依願	?一冊		三月六日
格物入門	何禮之助訓點	一冊	丁子屋榮助	三月廿九日
三軍内則拔萃	越前六合魁民瓜生三寅撰	一冊	同上	同上
赤城雪心傳	御幸町御池下餝齋山人校正	五冊	近江屋佐太郎	同上
謫居詩考	水藩東湖著	二冊	近江屋卯兵衛	同上
杞愛菴五十六字詩	淺津涉著 大原家藏板	一冊	石田屋忠兵衛	同上
英國練法號令詞	加藤練法場藏版	一冊	吉野屋仁兵衛	同上
大日本史贊藪	安積澹泊著 城多圖書校刻同藏版	六冊	伊勢屋庄三郎	同上
山陽文稿	大阪後藤松陰校正	二冊	田中屋治助	四月三日
殉難遺草	西八條城兼文編	一冊	近江屋卯兵衛	同上
有節錄	同上	一冊	同上	同上
西洋新説 蠶飼の栞	越前藩士浦銑之助譯	一冊	丁子屋榮助	同上
攻守略説	下總佐倉荒井鐵之助譯	二冊	村上勘右衛門	五月三日
松下熟叢書	長州藏版	一冊	吉野屋甚助	同上
同奉便抄	同上	二冊	同上	同上
萬國史畧	下總佐倉藩西村鼎重□譯	?	同上	同上
風簷遺草	桂取末彥者 松下熟藏板	一冊	同上	同上
鶯谷集	野口東頂著 富岡鐵齋校	一冊	松屋久兵衛	同上

興風後集	西七八條村城兼文著	一冊	田中屋治助	五月三日
學論	江州日野卽往寺	一冊	菱屋調兵衛	同上
大藏輔國集	同上	三冊	同上	同上
時勢論	土州藩中岡愼太郎著	一冊	吉野屋甚助	同上
皇學入門	洛東杉浦次郎右衛門著	一冊	村上勘右衛門	同上
杜詩評鈔	賴山陽増評	三冊	近江屋佐太郎	六月三日
楷書千字文	賴久太郎遺筆	二帖	本屋三右衛門	同上
唐詩百絶	勢州津坂孝□輯	一冊	丁子屋源次郎	同上
續隱玖蒐岐集	京都東籬園宗芳匠	一冊	菊屋喜兵衛	同上
楠公顯領集	洛東鐘南堂	一冊	村上勘右衛門	同上
夢かそへ	筑前野村望東女	六冊	同上	同上
早字引集	釜座竹屋町上 小島屋新造著	一冊	松田屋幸助	同上
演曦秘論		一冊	書屋嘉助	同上
慷慨雜集	小林良孝集錄	一冊	田中屋治兵衛	同上
近世群雄餘材小傳集	洛西城兼文輯	一冊	同上	同上
慷慨遺言	馬場文英輯	一冊	石田屋忠兵衛	同上
雄魂雜書	長州松下塾藏	一冊	吉野屋甚助	
殉難名簿集	洛西城兼文輯	一冊	近江屋卯兵衛	同上
同　拾遺	同上	一冊	同上	同上
王法政論經略注	岐阜威力院義導著	二冊	丁子屋九郎衛門	同上
哥神考	出雲國千家尊院著	一冊	井上治兵衛	六月廿四日
五經	同藏板	十一冊		同上
菜根百事譚	常州土浦藩 藤森弘菴著	五冊	丁子屋榮助	八月九日
古今名將傳		三冊	菊屋喜兵衛	同上
皇朝兵士　常服抄	西陣武田粟原信允著	三冊	村上勘右衛門	八月九日
稱呼私辨	富岡鐵齋著	一冊	近江屋佐太郎	同上
白鷗莊詩鈔	江州彦根田中芹披著	三冊	近江屋卯兵衛	同上
新政談	常州大浦藩 藤森弘庵著	五冊	丁子屋榮助	十月十七日
秘本玉くしげ	故人本居宣長著	一冊	同上	同上
奇文欣賞	仙台家中大槻崇著	一冊	同上	同上
四書字引大全		一冊	桝屋勘兵衛	同上
銅板 詩韻含英異同辨		一折	菱屋孫兵衛	同上
慨士遺音	津輕藩　吉田松蔭著	三冊	菱屋重助	同上
松下塾叢書之內 左氏兵義抄	長州吉田寅次郎著	一冊	吉野屋甚助	同上
上大地國形表	水府侯上表臣 藤田東湖注解	一冊	丁子屋榮助	同上
栗山上書	故人柴野彦助著	一冊	同上	同上
小學	神山四郎校正	四冊	村上勘右衛門	同上
孝經	神山四郎校正	一冊	同上	同上
蒲生先生遺稿	下野蒲生君平著 水府大野虎之進校	四冊	本屋多左衛門	同上
清新畫題	伊勢青山櫻木宏	一冊	丁子屋源次郎	同上
和訓英咭利文典	福井重三郎譯		田中屋治兵衛	同上
史論	東奥安積信著	一冊	同上	同上
西肥驚話	碩淵如雲老人編輯	二冊	井上治平	同上
校正新刻　文章軌範	淡路淡光校正	六冊	村上勘右衛門	同上
四書	神山四郎校正	十冊	桝屋勘兵衛	同上
清詩類選		二冊	丁子屋源次郎	同上
御改正　京都府職制				同上
局中規則				

書目	著者等	冊數	書肆	出版免許日附
布令必用 撰字引 初編 後編		二冊	吉野屋甚助	十一月十五日
校訂音訓 五經	大阪梶木町後藤屋俊藏事後藤松陰訓點	十二冊	同上	十一月
本朝三字經			村上勘兵衛	十二月十七日
日本外史論賛	賴山陽著	一冊	田中屋治助	
雍燕 大成明鑑		五冊		
殉難續集	青雲閣兼文著	一冊	近江屋卯兵衛	
常陸帶	水戸藩棉引泰助藏板	一冊	本屋小兵衛	
今世名詩選	伊豫竹内安□子編輯	二冊	田中治兵衛	
幽室文稿	洛西岡田和之助校正	一冊	村上勘右衛門	
日誌必用 法布令字引續編		一冊	同上	
神葬祭祝詞之案	出雲國意宇郡西來住村武田道年著	一枚	夷屋治助	
有節錄二編	洛西青雲閣城兼文輯	一冊	近江屋卯兵衛	
平安猶及錄	京一串居士著	一冊	田中屋仙助	
修心教餘師	江州日野鳥柳□著	三冊	村上勘右衛門	

明治三年之部

書目	著者等	冊數	書肆	出版免許日附
盡忠錄	京都富岡鐵齋校正	一冊	錢屋忠次郎	正月四日
水哉子	同上	一冊	同上	同上
謷言	同上	一冊	同上	同上
外番略表	仙臺藩大槻禎著	一冊	同上	同上
令旆餘光	讃岐藩藤川忠敬藏板	一冊	吉野屋甚助	正月五日
掌中銅鐫作詩自在	大森宗藏著	一折	井上治兵衛	同上
不如學齋叢書早集	津藩齋藤弘著	一冊	菱屋重助	同上
朴齋葦北詩抄	福山藩門田堯作著	四冊	堺屋仁兵衛	正月五日
同上 二編	同上	四冊	同上	同上
皇朝史略		十二冊		同上
皇史摘詠	出雲金本顯藏著	一冊	本屋四郎兵衛	同上
興風遺集	洛西城兼文輯	一冊	田中屋治兵衛	同上
講孟劄記	長門吉田寅次郎著	二冊	同上	同上
名山史料	土藩伊藤軍八著	一冊	吉野屋甚助	同上
法國 歩兵程式		一冊	書屋幸七	同上
同 號令		一冊	同上	同上
法銅西軍制		一冊	同上	同上
桂蔭	渡忠秋藏板	一冊	橘屋四郎兵衛	同上
俟采擇錄	長門松下塾藏板	一冊	田中屋治兵衛	同上
明律國字解	荻生但徠著 機晉造校正	四冊	同上	同上
標記增補 十八史略		七冊之内一冊	菱屋孫兵衛	同上
官板 知藩事鑑		一枚		正月九日
本朝三字經				正月十六日
孫子國字解	荻生徂徠著	七冊	菱屋文次郎	二月廿日
孟子校本	吉田迨藏板	一冊	菱屋孫兵衛	同上
先哲遺事	西京富岡□介著	一冊	錢屋惣四郎	同上
燕顏居叢書第一 水城軼事	同上	一冊	同上	同上
同第二 抑佛專神編	同上	一冊	同上	同上
千忠肅奏議	同上	一冊	同上	同上
楊椒山奏議	同上	一冊	同上	同上
唐本飜刻 掌中詩韻集成		二帖	書屋宗八	同上

雅俗文章便覽	四方茂平著	一冊	吉野屋仁兵衛	二月廿日
書翰必用天牘初學抄	同上	一冊	同上	同上
萬國歷史略	和州芝木呂之進譯	一冊	同上	同上
東湖隨筆	水藩藤田東湖著	一冊	菱屋重助	同上
幽室文稿	長門吉田松陰著 松下塾藏板	一冊	村上勘右衛門	四月四日
鳴鶴餘音	津山藩勤懸寅次郎輯錄同藏板	一冊	同上	同上
增補元明史略		四冊之内一冊	菱屋孫兵衛	同上
同 中本		四冊之内一冊	同上	同上
雄藩逸史	土浦藩伊藤軍八校訂	一冊	本屋彥九郎	四月九日
掌中詩礎必携		一冊	本屋芳兵衛	同上
本朝三字經注解	上野國大戸村 富澤文哉著			同上
莫烈遺墨帖	西京西八條村 城兼文輯	一帖	本屋政七	四月十日
不如學叢書乙集	津山藩齋藤弘集輯編	一冊	菱屋重助	同上
鳴鶴相和集				
蓮月尼和歌集	大田垣蓮月著	一冊	錢屋宗四郎	同上
操觚正名	勢州猪飼彥博著		同上	同上
諸葛武侯集	富岡獻助著		同上	同上
忠□	下京二番組小學校 川合興次輯		菊哥喜兵衛	同上
明治三十八家絕句	越後新潟兵□輯		山城屋佐兵衛	同上
遵生寶訓		一冊	上京十八番組小學校	四月
見聞偶筆	水戶藩藤田東湖著 伊藤軍八校	二冊	田中屋治兵衛	同上
早字引集		一冊		九月廿三日
詩韻含璧	唐本飜刻銅板 尾州長谷川棄一校正	五冊	村上勘右衛門	同上
通鑑覽要	長谷川棄一校正	七冊	同上	同上
增補掌中唐宋詩芳類苑大成	再刻銅板		著屋宗八	同上

辨誣筆錄	唐本飜刻	一冊	錢屋惣四郎	九月廿三日
明傳節義集	土井忠純著	二冊	同上	同上
幽室隨筆				
己未東行前日記	吉田松陰著	一冊	吉野屋甚助	同上
大增補□□掌中眞草字引大成	春敬堂校正	二帖	近江屋佐太郎	同上
農業備要	福岡藩河野禎造著	五冊	村上屋勘右衛門	同上
農業花曆	同上		同上	同上
順正書院記 並傳	福井藩新宮凉助著	二冊	福村屋治右衛門	十月二日
東湖詩抄	水戶藩□引恭助藏板	四冊	本屋小兵衛	同上
明倫抄	長州吉田松陰著	一冊	村上勘右衛門	同上
湖山樓詩鈔	豐橋藩小野向之助藏板	四冊	伊勢屋庄三郎	十月廿日
高山正之傳	參州山中城一郎藏板	一冊	井上治兵衛	同上
王學名義抄	京都桑原元吉郎校正	一冊	同上	同上
假名性理竹馬抄	同 校正	一冊	同上	同上
花ふゝき		一冊	同上	同上
京華名勝集	福井藩新宮凉助藏板	一冊	福村屋治右衛門	同上
神葬私考	名古屋藩高木郁二著	一冊	同上	同上
銅版韻箋大成 新增掌中熟字	津輕藩齋藤弘藏板	一帖	著屋重助	同上
雅文集成	京練□堂著	一冊	松屋久兵衛	同上
十八史略	京都岩垣其暉著	一冊	藤井孫兵衛	十一月三日
增補國史略	岩垣其暉校正	五冊	同上	同上
西算新書	越前福井水野文哉著	一冊	佐々木惣四郎	同上
双鶖集初篇	備後三原片岡中五郎	二冊	同上	同上
鑑撮	唐本飜刻上浦藩 伊藤軍八點	七冊	辻本仁兵衛	同上
吳康齋日錄	大阪大桑菴校正	一冊	井上治兵衛	同上

書目	著者等	冊數	書肆	出版免許日附
修齋近鑑 初篇 二篇	出雲國造北島家來 松本巖著	三冊	佐々木惣四郎	十一月三日
布令必用日誌書引	京都長谷川棄一校正 銅板	一冊	村上勘右衛門	十二月廿日

明治四年之部

書目	著者等	冊數	書肆	出版免許日附
掌中陰陽方位便覧大成	銅版京都吉澤光齋著	一冊	神先宗八	正月廿三日
今古示錢□考	洛西津久井清彰著	一冊	井上治兵衛	同上
櫻花集	京都城八郎著	二冊	田中治兵衛	同上
山家藥方集	遠州大藏永常著	三冊	井上治兵衛	同上
孝子蒙求	京都加藤有隣著	一冊	横田德之介	同上
象隆帖	賴山陽著	一帖	同上	同上
譯文須知	東江州鵜飼良輔著	二冊	井上治兵衛	同上
詩學端午要	京都西村一郎著	一帖	同上	同上
英佛二語便覧	京都浮田練要著 川原一石校		村上勘右衛門	三月八日
增補字彙玉篇字林大成	京都浮田練要校		井上治兵衛	同上
掌中清新絶句選	松田謙山校正	一帖	小川彥九郎	三月廿二日
八坂舊記集錄	八坂社務建内繁繼著	二冊	梅村伊兵衛	同上
掌中詩韻要略	有馬郁實著	一帖	神先宗八	同上
銅鐫新刊萬國輿地圖	橋本隆月校正	一枚	小川金助	同上
推我心書	備前熊澤了介著	一冊	井上治兵衛	同上

明治四年下半季之部 以下官許日附不明に付き出願日を記入す

書名	著者等	冊數	書肆	出願日
小學課業表			村上勘兵衛	八月九日
京都物産便覧			村上勘兵衛	八月十七日
小學規則			同上	九月十四日
社倉規則書			同上	十一月五日
小學生員便覧	伊豫奉書二枚夂		同上	十一月
京都寄留人名錄仕法書			同上	十二月廿三日

明治五年之部

書目	著者等	冊數	書肆	出願日
古今銀預り證券 御規則書	造幣寮御板	一冊	村上勘兵衛	正月八日
英佛二語便覧	浮田練要著 川原一石校	一冊	同上	五月廿五日
苗字鈔		一冊	同上	七月十七日
上京區分町名錄		一冊	同上	同上
上下京組分一覧表		二枚	同上	同上
掌中集書便覧	銅板 福富龍平著並刻	一折	島林專助	七月廿日
銅鐫懷寶大日本輿地全圖	福富龍平刻	一枚	村上勘兵衛	八月十七日
本朝三字經	再板	一冊	同上	八月廿九日
長松清風習字帖	僧長松清風著	一折	同上	七月四日（七月十日許可）
初學要略	同上	一冊	同上	七月四日（七月十日許可）
京都區分一覧表	銅板福富龍平校並刻	一枚	同上	七月十三日（七月十八日許可）
開化調法扇	銅板農高田敬五郎輯	一枚	島林專助	十月十二日
開化早見扇	銅板 同上	一枚	同上	同上
書言字考 初篇	銅鐫 乙葉宗兵衛輯	一折	乙葉宗兵衛	十月十七日（十月廿二日許可）
改正歴代年號	京都府藏板	一冊	村上勘兵衛	十月廿四日
小學子弟心得草	同上	一冊	同上	十月廿七日

書目	著者等	册數	書肆	出願日
修身初級	京都府藏板	一册	村上勘兵衛	十月廿七日
帝號	同上	一册	同上	同上
內國名	同上	一册	同上	同上
外國名	同上	一册	同上	同上
銅鐫地球掌覽		一枚	乙葉宗兵衛	十月廿七日
袖珍御規則集覽前卷	圖書職 遠藤茂平輯	一册	村上勘兵衛	十一月十三日（十一月廿四日許可）
戶籍使用年齡早繰	同著	一枚	同上	十一月十三日（十一月廿四日許可）
官等志	學校課 中山繁樹	一册	同上	九月二日
三幹衣	京都府典事 西尾爲忠著	一册	同上	九月十三日（十月許可）
頒書ニ『右之書世間之談話ニ託シ滑稽ヲ以固陋者ヲ闢キ開化ヲ勸メ候書云々』トアリ				
懷寶國郡稱呼	筆生業 遠藤茂平輯	一册	遠藤茂平	十月三日（十月七日許可）
邏卒御規則書		一册	村上勘兵衛	十月十八日
同折本仕立		一枚	同上	同上
同上下京區分 持場色譯之圖		一册	同上	同上
新曆			同上	十二月二日
御改正山城八郡丹波三郡區長名錄		一册	同上	十二月十八日

明治六年之部

書目	著者等	册數	書肆	出願日
太陽曆講釋	筆生業 遠藤茂平著	一册	乙葉宗兵衛	二月十五日（三月七日許可）
銅鐫地球掌覽		一枚	同上	五月十一日（五月十八日許可）
地方啓蒙		一册	同上	同上（五月十八日許可）
證券印紙界法 買求員數注文表		一枚	村上勘兵衛	六月十八日（六月廿五日許可）
單語篇 初篇 二篇	京都府藏板	二册	同上	十二月十二日
文明子もり哥	綴喜郡第四區小學校 句讀師小笠原長道著	一册	勝村次郎右衛門	十二月廿四日
十二學要論	原田千之助譯	兲册	大黑屋太郎右衛門	十二月廿七日
偏冠字引大全	宇喜多小十郎輯	一册	村上勘兵衛	十二月

明治七年之部

書名	著者等	册數	書肆	出願日
正文平假名 兩讀學國學入門	京都府 杉浦次郎右衛門著	一册	中西嘉助等	一月十日（一月十九日許可）
正文平假名 兩讀帝號歌	京都府乙葉宗兵衛校	一册	村上勘兵衛	一月十二日（一月廿二日許可）
智惠のすゝめ初篇	京都府圖書職 遠藤茂平輯	一册	同上	一月十二日（一月廿二日許可）
地球儀	京都府經師商 松井治兵衛作	經由尺五寸	松井治兵衛等	一月七日（一月廿四日許可）
楷書苗字鈔	京都府 平井茂直著	一册	村上勘兵衛	一月七日（一月廿四日許可）
黑田行元書臉 公用文 二編三編	滋賀縣 黑田行元著	二册	石田忠兵衛	一月廿二日（二月二日許可）
校正 幼童初學大全	京都府農 高田敬五郎輯	一册	島林專助	一月廿三日（二月三日許可）
習字書翰 復文手引草次篇		二册	松本甚助	一月廿五日（二月三日許可）
郎題手東 手引草		二册	同上	一月五日（二月三日許可）
習字 私用文章		一册	石田忠兵衛	一月廿二日（二月二日許可）
黑田行元書臉 私用文		一册	同上	一月廿二日（二月二日許可）
習字 公用文		一册	同上	一月廿二日（二月二日許可）
辻本治作著 小訓	辻本壽作著	一册	乙葉宗兵衛	二月廿日（三月三日許可）
書言字考 二篇	銅板 乙葉宗兵衛輯	一折	同上	二月十九日（三月十日許可）
孝行道案內 初篇	浮田小十郎著	一册	村上治兵衛	三月十日（三月十八日許可）
福富正水校正京都繪圖	銅板 福富正水校合	一枚	村上勘兵衛	三月廿五日
本朝三字經	高田敬五郎訂正	一册	同上	三月廿五日（四月四日許可）
皇國之言靈三種之寶	高松明良校	一枚	葛野郡第五區松尾谷村小學校	明治六年十二月十九日 同月廿八日許可

清水公敬編官職名	小倉縣下社籍 清水公敬	一册	村上勘兵衛	二月十八日（四月三十日許可）
本朝歴代國史要略上卷	京都府士族桂直好著	一册	同上	四月十七日（五月二日許可）
京都裁判所官員錄		一册		五月七日
本朝歴代 國史要略中下卷	桂直好著	二册	村上勘兵衛	五月十四日（五月廿七日許可）
銅版細書 開化訓蒙初篇	乙葉宗兵衛編	一册	同上	三月十八日（六月廿日許可）
布令日誌新聞必用 開化いろは字引	銅版 山本小三郎編並刻	一册	同上	六月廿五日（七月九日許可）
開化女用文章	京都府醫辻本壽作著	二册	村上治平等	六月廿五日（七月五日許可）
高田謙五和解 正文平假名 本朝三字經	高田平五郎著	一册	村上勘兵衛	七月二日（七月十二日許可）
遠藤茂平輯 袖珍御規則集覽	遠藤茂平輯	一册	同上	七月廿九日（八月八日許可）
佛山堂詩鈔三篇	村上潜藏著 江馬正人校	三册	村上治平等	八月十七日（九月九日許可）
安立信胤編輯 大日本名勝要覽	銅版 安立信胤輯	一册	同上	九月十九日
新製地球儀		一個		十月
袖珍御規則集覽 卷二三	遠藤茂平輯	二册	村上勘兵衛	六月七日（九月廿二日許可）
袖珍御規則集覽 卷二	同上	一册	同上	十月廿二日（十月卅日許可）
村上勘兵衛輯 同上卷三		一册	同上	十月廿二日（十月卅日許可）
御維新以來 新刻書目便覽	村上勘兵衛輯	一册	同上	十月十三日（十月卅日許可）
浮田小十郎校正 立身虎之卷	辻忠郎兵衛著 浮田小十郎校	四册	村上治平	十月十七日（十一月五日許可）
京都府管轄便覽		一册		十一月廿五日
福富正水校正 地球儀	銅版福富正水校並刻	經曲尺二寸五	村上勘兵衛	十一月十七日（十一月廿四日許可）
同上	同上	經曲尺一分	同上	十一月十七日（十一月廿四日許可）
福富正水編輯 掌中集書便覽	同上	一册	乙葉宗兵衛等	五月二日（十二月十六日許可）

寄贈圖書一覽

愛書趣味　第九號

國學院雜誌　發行每　東京國文院大學刊

九軒　卷ノ二　夕霧太夫特輯號

墓碑史蹟研究　發月每　最近號四十二册

東京府下代々木四三〇磯ヶ谷紫紅發行

大大阪　發行每

本田溪花坊編輯　川柳雜誌

大阪古書組合月報　大阪古書組合刊

窪川書店古書時報　一號　二號

東京小石川白山坂上　窪川書店刊

書史　第一號　大阪書史同人刊

三百部限定出版物石州紙、和裝仕立、筆者は、大阪での書物通計りなれば惡からう筈なし、精撰された內容挿畫の思ひ切つた趣向と相待つて、錦上花を副ふ。記事の多方面なるは何より羨し、編輯者の苦心の程を察すべく、永續を望む。

書誌　第二年二册　書物同好會編

久しく休刊中の本誌は舊發行所阪本書店より文苑閣に變り（二年一册より）確實に續刊せらるゝ事となつた。

古本屋　第一號　大阪荒木書店發行

荒木伊兵衛氏の先代の業を繼ぎ亡父の一週年紀念として發行せられたるもの、表紙のみで、餘分に一册出來る樣な未だかつて同種雜誌に見ざる贅澤さ。

魯庵、泣菫、外骨、吸江の大家連に、齋藤、井上氏等書物通が執筆されてゐる。概して、前者書史の紹介的の記事に對して、感想的な記事の多いのは面白い對照である。終りに同店の在品の古書目錄を載す。年五回發行の由、舊名幸太郎氏の奮勵を望む。

書物の歌

魚尾康之助

杉田大學堂の仕事に好意を寄せて、頼まれもせぬのに書物禮讃の、宣傳をしてやらうと云ふ義俠心があつてのことではなく、唯、書物典籍を吟咏した歌を、數首抄出して、それに自分の所感を誌した忘備錄にすぎないので勿論兒童の遊戲に等しく、大方諸賢の嘲笑と誹謗は到底、免れることの出來ぬのを、私自身でも能く承知してゐる程、幼稚極まる物である事を、前もつてお斷りしてをきたい。

○

東北地方より其の以北に行つて、少しでも歌に志のある者に向つて、誰が一番秀れてゐる歌人であるかと云ふ質問をすると、皆申し合せたやうに、石川啄木だと答へるさうである。鄕土歌人石川啄木の名を、東北地方の人々が、九天の高きに上げるのは無理からぬことで、明治中期の波亂多き歌壇に、大きな足跡を印した彼の歌や、彼の性格や、その生活なりは、歌壇の先輩諸氏によつて、屢々論じられた所で、今更、私が申すまでもない。轗軻不遇に加へて、不治の病氣に呻吟しながら、妻子の生活を保障しなければならぬ位置にゐた啄木は、自分の欲求はよほど、控へ目に愼しんでゐたらしく思はれるのである。

　本を買ひたし本を買ひたしとあてつけ
　　のつもりではなけれど妻に言ひてみる

この歌の良し惡しは別として觀ると、容易にさうした想像が起つてくるのである。節約に節約をしても尙、餘裕のない生活をして居ながら、勉强をする心がかくの如く熾んで居られたのは尊い極みである。勉强する者にとつて一番大切なるものは書物であつて、その書物に對する强い愛著が、片時も腦裡より去らなかつた彼は、生活派の鼻祖と仰がれ、啄木といふ名を不朽に殘した所以ではなからうか。

○

石川啄木の死後、その遺稿を整理し、東雲堂より啄木歌集出版の勞を執られた、竹馬の友、土岐善麿氏の歌集『綠の斜面』に

　たまたましきりに欲しき古本を坎の棚
　　に見つつ金なし

がある。書物を買ひ求めて勉强することは、譯のなさゝうな問題でありながら、土岐善麿氏のやうに、高名な方までが相當惱まされてゐる問題であることを知つて、常にかうした經驗を味つてゐる自分は、いみじく感じたのである。この歌の『金なし』と言つても、この場合に、あやにくお持合せの御都合が惡かつたのであつて、自分らの如き貧生の言ふ所謂『金なし』とは內容が全然違ふのは申すまでもないが、折角、寶の山に入りながら傍觀しなければならないお心持は、想ひ當ることがあるので、略々見當はつくのである。恐らくこの歌の時の土岐善麿氏は、年頃の娘が、吳服店にて欲しいと思ふ品物が、錢が不足して購へず、すごすごとして戾るやうな愛惜な情でゐられたであらうと思ふのである。

○

松倉米吉と言つても、あまり知つて居る人は尠ないかも知れないが、米吉の遺歌集が、アララギ叢書第十二編として、既に世に刊行

され、版を重ねてゐるのであるから、その作歌の技倆は大概、專門以外の人でもおわかりになると思ふ。自分と米吉とは、年齢に於ても何程の差もなし、米吉が生前最も親しく交つてゐた人々は、今は同門の先輩となつてゐるので、自分が米吉に會ふ機會は少くは無かつたのであるが、私は、彼を知らずに終つて了つたが、今考へると殘念でたまらない。米吉に關しては、彼の親友の方々や、歌の師匠であつた古泉千樫氏より直接に、承はつたこともあるので、記憶に殘つてゐる處を綴り合して考へてみると、薄倖な運命が啄木によく似てゐるのである。學校を中途で止めたり、常に物資に窮乏して苦しめられてゐた點や、夭折した不治の病氣までが、同一であるのも何か深い因縁が絡つてゐる樣にさへ感じられるのである。更に歌に歌はれた思想や材料までが、殆ど似てゐるのも、亦不思議といへるのであるが、其の米吉の歌に

　金を得て母に行く行く早稲田通りこ
　へられずに又書估に入る

の一首がある。米吉は親一人、子一人のさゝやかな生活で、至情の人で母の喜ぶ顔を見るのを無上の樂しみとしたのであらう。その母親を喜ばせるために、酬いられた勞銀を摑んで吾家に急ぐ途中の諷詠であらう。自分にも曾て覺えのあることであつて、何物を措いても書物を求めようとする、向學の心持が忝ないのである。學問の道に命を果さんとする者は、皆かうした尊い精進に餘念がないのではあるまいか。たま〳〵、米吉の歌によつて知つたのであるが、其處が私には有難いのである。

○

島木赤彦氏歿後のアララギを、引き繼いで褒貶を双肩に負つて立つた、齋藤茂吉氏の處女歌集赤光に、

　本よみて賢くなれと戰場のわが兄は錢
　を呉れたまひたり

同氏の作品としては、上乘の物ではあるまいが、齋藤氏が、今日社會的にも將又歌壇に於て占めてゐる位置も、氏自身の努力はさらにかうした兄樣の優しい教導に據る力も與つて大きいであらう。一心不亂に勉强せざるを得なかつたであらう。戰時手當の俸給の中を割いて、弟の勉强を助けてくれる優しい兄樣を戴ける齋藤氏が、羨しい次第である。

以上四首の中では、土岐氏の歌の境地と、米吉の心境は特に感銘が深い、自分の身を顧みて、彷彿と眼前に浮びあがつてくる物がある。啄木の歌の境地には、鈍感で妻のない私には何物かに支障されてゐるやうで、ぴつだり胸に迫らないが、でもいまにこの經驗を甞める時が必ず來るであらう。その時になつてこの歌を味ふと、皮肉ともつかず、愚痴ともつかず、妻に不平を漏らす作者の切ない心のうちを、感受する事が出來るであらう。

○

歌としては面白い出來榮でなくとも、私はかうした歌は謹んで拜見する。それが、歌としても立派な價値を持つてゐる作品なれば猶さらのことである。徳川吉宗を父に、松平樂翁を子に持つた、田安宗武の天降言に

　書よまであそびわたるは網の中に集ま
　る魚のたのしむがごと

比喩が如何にも適切で、歌としても傑れて居り、我が愛誦歌の一つである。

○

百人一首の『由良のとを渡る舟人かぢを絶え行方も知らぬ戀のみちかな』の歌で、歌に携はらぬ人までが名を知つてゐる、曾根好忠の曾丹集に

耳にきき目に見ることをうつし置て行
末の世の人にいはせん

も高貴な清涼劑であつて、輕々看過することの出來ぬ歌である。荒木田久老の

咲花の匂ふがごとくふることはひらけ
だちぬよ時のゆければ

文化文政の國學の隆興は、さながら春の野の名もなき草までが、花を開いて盛觀を呈したにも似てゐたであらう。皇學に身を委ねた久老のこの偶感は當然であつて、その文運を謳歌した歌を詠むのは、實に愉快なことで非常に喜ばしい。

縣門に入ること、久老より一年の兄であり、年齡に於て十六年の長である本居宣長は、流石に國學界の柱石で、書物を歌つた歌はかなりある。

書よめば大和もろこしむかしいまよろ
づのことを知るぞうれしき

いろはたに得知らぬ人ははかなしと見
つつ書見ぬ人ぞはかなき

食ふものは滿ちてもきゆる腹の中に長
く殘るはよめる書なり

書よまでなにつれづれをなぐさめむ春
雨のころ秋のながき夜

書よめば又たぐひなきたのしみをふみ
見ぬ人は知らぬなりけり

これらの歌には、單に學者らしい歌だと言つて片付けられない。歌の外形に現はれてゐるものに對しては、遺憾な點が無いでもないが一歩進めて、歌の内容を詮鑿すると三十餘年間心血を注いで、古事記傳の完成に力めた、强固な意志が育てられてゐたに氣がつくであらうと思ふ。其の間の消息が私には如何にも嬉しいのである。勉學の途にある輩がこの點に注意を拂はないならば、それは未だしき人だと私は信じてゐる。古く書物の歌を詠んだのに、日本紀竟宴歌に、橘朝臣直幹の作がある。

わだつみの千重の白波こえてこそ八し
まの國に文はつたふれ

支那の文化が盛んに輸入された、奈良の盛時に簇出した歌人達は、こぞつて文運を仰望したに拘らず、萬葉集には書物の歌が見當らないのが物足らなく感じる。—私の記憶が誤つてゐれば訂正をする—其の他、古歌に詠まれた書物の歌は概して、書物の徳を稱へたものが多い。今日の如く、印刷術の進步して居らぬ時代であるから、一冊の書物を手に入れるのにも、なみ〳〵ならぬ苦心を要したであらう。從つて書物に感謝し、禮讃する念は現代人の及びも着かぬ事があつたかも知れない。或る碩儒の遺言の箇條に、書物を讀む場合に必ず指に唾をつけて、本を繙いてはいけないと誡めたさうである。それにも拘はらず、書物に苦心した歌が無く、現代の比較的書物を樂に手を入れられる時に在つて、啄木や、土岐氏や、米吉の歌の如く、書物を愛著し、苦心してゐるのを寂しく思ふのである。

編輯後記

本號の編輯を終へて、印刷の方へ廻したのは、二月の末であつた。何時も遅れたお詑をしなければならぬのを、悔しくも思ひ、恥しくも思つたから、今度こそはビツクリするほど、早く出して見たかつたのである。それには寄稿された諸氏の、御後援よろしきを得たからであるが、やはり印刷所の都合で、未だに校正の半分も來ない。これほどまであせつても、駄目なのかと、腹立たしくさへなる。早くから原稿を頂いてゐる先生方に對して申譯かない。年四回の雜誌が、正月に出て、次が四月に出ることは、雜誌自身としては決して遅れたと云ふわけではないけれども、私の氣持からすれば、一年も半年も遅れたやうでたまらなくなる。

本誌を通じて永い間、御厄介になつた小生も、愈々一身上の都合で、御別れせねばならぬやうになりました。慣れない仕事を引き受けて、編輯に校正に、何一つ御滿足を與へることの出來なかつたことを、厚く御詫び申します。これを御緣に、今後とも萬事宜しく御指導下さることを、切に御願ひ申し上ます。

校正半にして、急遽歸國せねばならぬやらになりました。全く申譯ありませぬ。去るに臨みまして、本誌の益々發展すると共に、寄稿家諸氏や、愛讀者諸彦の、御壯健と御繁榮とを、お祈り申します。

四月四日歸國の途につかんとして

擔雪金生

前記金君の話の様に二月末に原稿締切つた處印刷屋の都合、及店の方が學期初めで多忙の爲、延刊致しました。毎々ながら申譯ない事でず。随つて本號には當店の販賣書目は載せませんでした。その代り本誌發行の後、十五日を經て別に販賣書目十一號を刊行致す考へです。その節は澤山御買上の程を御願ひ致します。書目は御申込次第無代進呈致します。

大學堂主人拜

發行 年四回（多少ノ遲速アリ）
定價 一部 金參拾五錢
照會ハ往復ハガキ又ハ參錢切手封入ノ事

昭和二年四月二十五日印刷
昭和二年四月三十日發行

編輯兼發行人 京都市三條通寺町東入 杉田長太郎
印刷者 京都市先斗町三條南入 堀尾幸太郎
印刷所 京都市東山線仁王門南 唐舟屋印刷所

發行所 京都市三條通寺町東入 杉田大學堂書店
電中五〇六三 振替大阪三一〇四四

Political progress in Japan. (Forum, vol. X p. 701 and foll.) New York.

Prisons in Japan. (Overland Monthly, vol. 15, p. 289 and foll.), San Francisco.

Streets and streetsnames of Yedo. (Trans. Asiatic Soc. Japan, vol. 1, pp. 18-26), 8°. Yokohama, 1873.

Treaties of the United States with Japan. (Andover Review, vol. 9, pp. 605 and foll.). Boston.



Japanese art, artists and artisans, with illustrations from drawings by a Japanese artist. (Scribner's Magazine, 1888, January), 8°, New York.

Japanese art symbols, illustrated by Ran Roku Ozawa of Tokyo (Scribner's Magazine vol. V pp. 88-101) 8°, New York, 1889.

Japanese ivory carving. (Harper's Magazine, 1888, April), 8°. New York.

Japanese merchant's home. (Overland Monthly, vol. 12, p. 31 and foll.), San Francisco.

Japanese national exposition 1903. (Outlook. vol. 74, Aug. 1, pp. 801-...), New York, 1903.

Japanese national holidays. (Independent. vol. 49. pp. 837-...), New York, 1897.

Japanese revolution of 1868-71. (North American Review, vol. 120 p. 281 and foll.). Boston.

Japanese rock-crystal with illustrations. (Harper's New Monthly Magazine, vol. 59. pp. 405 and foll.), 8°, New York, 1879.

Légende japonaise d'après M. William Elliot Griffis traduite par M. le Dr. L. Ardouin. (Bul. Soc. Géog. Rochefort, IV, 1882-1883, pp. 150-153.)

Marriage in high life in Japan (Lippincott's Magazine, vol. 15, p. 176 and foll.), Philadelphia.

Mythical zoölogy of Japan. (Overland Monthly, vol. 13 p. 139 and foll.). San Francisco.

Nature and people in Japan (Century, vol. 17 pp. 231 and foll.) New York.

Nature and people in Japan (Century, vol. 17 pp. 231 and foll.) New York.

New Years eve in Tokyo (Overland Monthly, vol. 13, p. 438 and foll.), San Francisco.

Our war with one gun in 1864 (New England Magazine, New Series, vol. 28, August, pp. 662-...), Bost., Mass., 1903.

Constitution of Japan. (Forum, vol. 7, pp. 404 and foll.). New York. (Chautauquan, vol. 12, pp. 591 and foll.). New York.

Corea, China and Japan. (Literary World, vol. 25. pp. 264-...), Bost., Mass., 1894. (Chautauquan, vol. 20, pp. 70-...), Meadville, Pa., 1895.

Corean origin of Japan, illustrated. (Century, vol. XXV, p. 224-229), New York, 1882.

The Corean origin of Japanese art. (The Century Illustrated Monthly Magazine. Vol. 25, Dec., pp. 224-229), 8°, New York.

Daimio's life. (Lippincott's Magazine, vol. 16, p. 199 and foll.), Philadelphia.

The development of political parties in Japan. (North American Review. vol. 175, pp. 676-690), 8°. New York, 1902.

The "Elder Statesmen" of Japan. (North American Review, 1906, Feb.), 8°. New York.

The elder statesmen of Japan: The power behind the Portsmouth treaty. (North American Review. vol. 18, pp. 215-227), 8°. New York, 1906.

The folklore of Japan. A lecture held at the International Folklore Congress of the World's Columbia Exhibition in 1893 (Archives of the International Folklore Association. vol. 1., pp. 294-303). 8°, Chicago, 1898.

Fox myths of Japan. (Lippincott's Magazine, vol. 13. pp. 57 and foll.), Philadelphia.

The games and sports of Japanese children. (Trans. Asiat. Soc. Japan, vol. 2. pp. 125-141). 8°. Yokohama, 1874.

Inside Japan (Lippincott's Magazine, vol. 12 p. 174 and foll.) Philadelphia.

Japan: geographical and social (Bulletin of the American Geographical Society, 1878. pt. 2, pp. 78-92) New York.

Japan as an industrial power. (Chautauquan. vol. 24. Nov. pp. 201-205), 8°, Meadville, Pa., 1896.

The Mikado—Institution and Person, 1915.
Millard Fillmore—Constructive Statesman, 1915.
Bonnie Scotland and What We Owe Her, 1916.
Dutch Fairy Tales, 1918.
Belgian Fairy Tales, 1919.
Young People's History of the Pilgrims, 1920.
Swiss Fairy Tales, 1920.
Was Brant at Wyoming? 1921.
Welsh Fairy Tales, 1921.
Korean Fairy Tales, 1922.
Japanese Fairy Tales, 1923.

Editor: Sawyer's History of the Pilgrims and Puritans, 1922; Scheffer's History of the Free Churchmen in Holland, 1922.

雑誌に寄稿せるもの

American relations with Japan. (New England's Magazine New Series, Vol. XI. Nov. pp, 257), Bost., Mass., 1894. (Magazine of American History, vol. 27. pp. 449-...) New York, 1892.

Asiatic history: China, Corea, Japan, 88 pp. 1881 (or 1882?) (Chautauquan Literary and scient. circle (New York State U.S.A.), Text book No. 34.)

August elections in Japan. (Independent. vol. 54, Sept. 25th, pp. 2295-...), New York, 1902.

Call on a bonze (Lippincott's Magazine, vol. 13 p. 725 and foll.) Philadelphia.

The century changes in China and Japan. An article in "The XIX Century, a review of progress by various authors," 494 pp., New York, 1904.

Coercion in Japan (Nation, vol. 46, pp. 129 and foll.). New York.

Sir William Johnson and the Six Nations, 1891.

Japan—In History, Folk-lore and Art, 1892.

Influence of Netherlands on the English Commonwealth and American Republic, 1892.

Brave Little Holland & What She Taught Us, 1894.

The Religions of Japan, 1895.

Townsend Harris—First American Envoy in Japan, 1895.

Romance of Discovery, 1897.

Romance of American Colonization, 1898.

Romance of Conquest, 1899.

The Pilgrims in Their Three Homes, 1898.

The Students' Motley, 1898.

The American in Holland, 1899.

America in the East, 1899.

Verbeck of Japan, 1900.

The Pathfinders of the Revolution, 1900.

In the Mikado's Service, 1901.

A Maker of the New Orient, 1902.

Mighty England—Our Old Home, 1902.

Young People's History of Holland, 1903.

Sunny Memories of Three Pastorates with a Selection of Sermons and Essays, 1903.

Dux Christus, An Outline Study of Japan, 1904.

The Japanese Nation in Evolution, 1907.

The Firefly's Lovers, 1908.

The Story of New Netherland, 1909.

China's Story in Myth, Legend, Art and Annals, 1910.

The Unmannerly Tiger and Other Korean Tales, 1911.

Belgium, the Land of Art, 1912.

A Modern Pioneer in Korea, 1912.

Hepburn of Japan, Pioneer of Science of Religion, 1913.

The House We Live In—Architect and Tenant, 1914.

Dr. Griffis の著書 (單行本)

COMPILED BY T. SASAOKA.

New Japan primer; no. 1. San Francisco, 1872. 16°.

New Japan Spelling Book: a progressive series of lessons in spelling, with exercises in reading, writing, dictation and translation; designed as a Condensed manual of the elements of the English language, for the Japanese pupils who are learning English. By William E. Griffis, A.M., Professor of chemistry & physics in the Mom Bu Nan Ko, Tokeio. San Francisco & Yokohama, 1872. 12°.

New Japan pictorial primer, introductory to the "New Japan Readers" 8°, San Francisco, 1872.

New Japan second reader,

New Japan third reader,

New Japan universal history. 187-? Published by A.L. Bancroft & Co., San Francisco, and Stone & Chipman, Yokohama.

The Tokio Guide. Yokohama, 1874.

The Yokohama Guide. Yokohama, 1874.

The Mikado's Empire, 1876.

Japanese Fairy World, 1880.

Asiatic History; China, Korea and Japan, 1881.

Korea—The Hermit Nation, 1882.

Korea, Without and Within, 1885.

The Rutgers graduates in Japan. An address delivered in Kirkpatrick Chapel, Rutger's College, June 16th, 1885. 32 pp. 8°. Albany, 1886.

Matthew Calbraith Perry, 1887.

The Lily Among Thorns, 1889.

The Growth and Fall of Feudalism. Tokyo, 1890.

Honda, the Samurai, 1890.

habit must be abolished, if the stature of the nation is to be made normal. Blood is life and in infancy growth. Let the cradle come into use, and the baby kick out its legs. To abolish this custom of carrying babies would by more than founding a university.

The diet of the Japanese must be more varied and enriched. This can be done by the introduction of cattle, which would mean also greater improvement of the soil and the improvement of many industries.

In a word, New Japan with all its promise is the result of the introduction of hitherto unused mechanical forces; of the idea of the value of time; of the benefit of education; together with the abolition of things detrimental. Let the universities continue their questioning of nature and the scrutiny and application of forces. Let them extend the benefits of their researches and discoveries to the masses, through the encouragement of education among the people. The sure result will be the ever increasing greatness of Everlasting Great Japan.

This was my insubstance message to the Mikado's Empire, when the Meiji was beginning, nearly sixty years ago. It is the same, but with longer perspective and more exuberant hope and faith at the beginning of the new era of Taishō. Let it be, with the educated leaders of the Japanese people as with the Romans of old,

"They can,
Because they think they can," and they will.

February 7, 1927.

to the benefits and advantages wrought out under wise statesmen and public-spirited men of affairs, to able mechanics, inventory and men of enterprise in all lines of human endeavor.

Education certainly levels upward, and in entering upon the subject, you will allow me to rejoice that I was the first of the *O-yatoi* who, according to the "Charter Oath" of the Meiji Tenno, invited out from foreign countries in 1870. Now, I note the results of the programme of popular education, so grandly entered up by the rulers in the early Meiji era. They have transformed Japan and I, with my readers, share the happiness of triumph.

Some of the outstanding features of the reforms suggested or inaugurated in the Meiji era are already permanent features of Japanese public life and the benefits conferred are already visible in the improved health and appearance of the people at large. The momentum of these reforms augur well for sure and continuing progress and still greater triumphs. The honor set upon manual labor, intelligent industry, and upon mercantile enterprise mean wealth to the nation at home, and a more generous recognition of Japan by the nations of the world. Education is the basis of all progress, and an enlightened government being its patron and provider, Dai Nippon is sure to progress. On this point I need not enlarge. It is visible to my eyes. So long as Japan maintains a high educational standard, her going back is an impossibility.

Somethings yet need reform. The Japanese people can improve their physique. They can win a loftier stature by doing away with the bad habit of sitting on their legs and of carrying the infants tightly swathed on the backs of their mothers and their elders. The present custom hinders the circulation of the blood by compressing the upper part of the leg, when the young child is bound to the back of the adult in its infancy. Later the habit of sitting on the lower part—the calf of the leg—stunts growth. This

and their scars, the marking of faces by the small-pox and its chronic continuance among all classes, the frequent blindness, bad teeth, scabby heads, were all apparent. The exposure of phallic emblems, with other indecencies in public places and even in the precincts of temples, were almost universal.

To say nothing of things and customs disgusting and unhygenic, of the public edict boards denouncing the christian religion—the religion of the most highly civilized nations—there was, as compared with to-day much social oppression of the lower classes. It was the general belief of the samurai that the common people could be governed only by force. Hence no fewer than half a million men wore swords as part of their daily dress. It was as though Japan was garrisoned by a hostile or conquering army and the people as conquered each. Many of the rights and privileges that are the birthright of present day Japanese were in 1870 unknown. The people were kept in ignorance of the law, while cruel and unusual punishments, with the public exposure of criminal heads on the pillories was the common custom.

Now, in coming to Japan in the era of Tai-shō and Shō-wa, I look for these, but see them not and I rejoice. They are gone. Under the benign rule of the Meiji Tennō and his very able body of advisers, most of these relics of barbarism have disappeared. In their place has come codified and public law, representative government, a disarming and loss of special privilege to a once dominant class, education free to all. Many of the happier features of enlightened democracy, which is yet tempered by loyalty to the emperor and the throne and with a high regard for things noble and ancient remain, long way these two elements—progress of the community tempered by prudence and adherence to the nobler principles on which the Japanese empire has been founded, remain.

Yet this admiration for the men who wrought the great reforms, nor joy at the abolition of ancient abuses do not blind me

WILLIAM ELLIOT GRIFFIS D.D., L.H.D. ON HIS SECOND VISIT TO JAPAN.

Union '77

Wm Elliot Griffis D.D., L.H.D. on his second visit to Japan.



My impressions on revisiting Japan, and fifty-two years of absence, and fifty-six years after first seeing the apex of Fujiyama, at 5 a.m. December 29th, 1870, are even more strongly of a negative, than of a positive nature. The material improvements and the uplift of the masses into a larger-freedom and to a standard of comfort, I expected to find; for with these purposes in view, I came to Japan. My purpose in teaching science and in urging my Japanese friends to inquire into western civilization and to adopt its best features, was with a view to benefit not only the privileged minority, but rather, and more specially the masses of the Japanese people. In this expectation I have not been disappointed, and I rejoice with all Japanese patriots in the success obtained and everywhere visible in the empire, in this era so auspicious for further development—the era of Shō-wa.

What has made the profoundest impression upon my mind has come from the absence of what of a repulsive nature was outstanding in the early Meiji days, that is under the feudal system. The very fact that today, even the mention of certain of these things, now absent, is disagreeable, and that even in public discourse, jar upon the feelings of an sudience, is convincing proof of their former hideous reality. The prevalence of visible diseases

京都月曜會同人編

江戸時代初期繪入本百種

六月廿日發行

解說附限定二百五十部

賣價實費七八圓の豫定

本書は慶長元和頃より[illegible]籍の一部を精巧なる玻璃版に撮り詳細なる[illegible]解說は斯界の權威[illegible]た

尙題箋及序文は文[illegible]

部數僅少に付御希[illegible]前金を要せず）

御斷り　前號の豫告に[illegible]、再三やり直し、その爲延刊致し居り候

豫約御申込濟の[illegible]

發行所

京都市三條[illegible]寺町東入

杉田大學堂書店

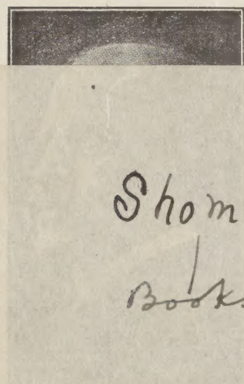
電話中五〇六三番

振替大阪三一〇四四番

WILLIAM ELLIOT GRIFFIS D.D., L.H.D. ON HIS SECOND VISIT TO JAPAN.

Union '77

Wm Elliot Griffis D.D., L.H.D. on his second visit to Japan.



My impressions on revisiting Japan, and fifty-two years of absence, and fifty-six years after first seeing the apex of Fujiyama, at 5 a.m. December 29th, 1870, are even more strongly of a negative, than of a positive nature. The material improvements and the uplift of the masses into a larger freedom and to a standard of comfort, I expected to find; for with these purposes in view, I came to Japan. My purpose in teaching science and in urging my Japanese friends to inquire into western civilization and to adopt its best features, was with a view to benefit not only the privileged minority, but rather, and more specially the masses of the Japanese people. In this expectation I have not been disappointed, and I rejoice with all Japanese patriots in the success obtained and everywhere visible in the empire, in this era so auspicious for further development—the era of Shō-wa.

Shomotsu Raisan
Books of Praises
publised by the Sugita University book shop (Kyoto)

What has made the profoundest impression upon my mind has come from the absence of what of a repulsive nature was outstanding in the early Meiji days, that is under the feudal system. The very fact that today, even the mention of certain of these things, now absent, is disagreeable, and that even in public discourse, jar upon the feelings of an sudience, is convincing proof of their former hideous reality. The prevalence of visible diseases

京都月曜會同人編

江戸時代初期繪入本百種

六月初旬發行

解說附限定二百五十部
賣價實費七八圓の豫定

本書は慶長元和頃より元祿までに刋行せられた奇書珍籍の一部を精巧なる玻璃版に撮り詳細なる解說を附したものなり
解說は斯界の權威龍谷大學敎授禿氏祐祥氏の手になる
尙題簽及序文は文學博士吉澤義則氏に御願ひ致しました
部數僅少に付御希望の方は前以て御申込みありたし（前金を要せず）

御斷り　前號の豫告に依れば既に發行濟の處、本書の眼目たる玻璃版、不出來の爲、再三やり直し、その爲延刊致し居り候
豫約御申込濟の御方々は何分の御猶豫願上候

京都市三條通寺町東入

發行所　杉田大學堂書店

電話中五〇六三番
振替大阪三一〇四四番

各大學及圖書館御用

和洋古書籍賣買

書物禮讃發行所



杉田大學堂書店

京都市三條通寺町東入

電中五〇六三番

振替大阪一三〇四四番

定價金參拾五錢